

栃木県埋蔵文化財調査報告第321集

谷 向 遺 跡

— 北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 XIII —

2009. 3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

序

北関東自動車道は群馬・栃木・茨城の3県を結ぶ高速道路で、古くからの歴史・産業を合わせ持つ北関東の各都市を繋ぎ、沿線の産業の発展や観光の振興などを目指して計画されました。その建設に先立ち、路線内に所在する遺跡について関係機関と協議の結果、記録による保存のための発掘調査を実施することとなりました。

谷向遺跡は、壬生町国谷の台地上に所在します。今回の発掘調査では、縄文時代の人々が暮らした竪穴住居の跡や、土器や石器といった当時の生活にとって重要な道具類を発見いたしました。また、現代の耕作地の下からは、近世の溝や穴の跡が見つかっています。

本書はその調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして、郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで多くのご協力をいただきました東日本高速道路株式会社、壬生町教育委員会、栃木県県土整備部をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

栃木県教育委員会

教育長 須藤 稔

例 言

1. 本書は、栃木県壬生町国谷地内に所在する谷向遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の略号は「MB-TN」である。
2. 発掘調査は、北関東自動車道（都賀～上三川地区）建設に伴う記録保存調査であり、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団東京建設局）の委託事業として、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の調査期間及び調査担当者は以下の通りである。

平成 18 年度（確認調査）
平成 19 年 2 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日 主査：江原 英 主任：今平昌子 宮田宣浩
平成 19 年度（本調査）
平成 19 年 4 月 1 日～平成 19 年 6 月 30 日 主査：仲山英樹 主事：峰崎武昭
平成 20 年度（整理・報告作業）
平成 20 年 10 月 1 日～平成 21 年 3 月 30 日 主査：田代己佳
4. 本書の作成・執筆・編集は、田代己佳が担当した。確認調査の結果については、江原英の作成した「平成 18 年度北関東自動車道（壬生パーキング）建設事業に係る確認調査結果報告書」を改編・補足して掲載している。
5. 写真撮影は、発掘調査における遺構を各担当者が行い、掲載遺物については日立レフテクノ株式会社に委託した。
6. 発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたっては、次の方々から御指導、御協力を賜った。

東日本高速道路株式会社関東第二支社宇都宮工事事務所（旧日本道路公団東京建設局宇都宮工事事務所）、栃木県教育委員会事務局文化財課、栃木県土木部高速道路対策室、栃木県土地開発公社、壬生町教育委員会
7. 遺跡の概要は年報等で一部公表されているが、本書を正報告とする。
8. 本遺跡の出土遺物、資料類は財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターに保管している。
9. 発掘調査及び整理・報告書作成の参加者は以下の通りである（五十音順・敬称略）。

（発掘調査）
五十嵐裕子、大栗利子、大栗友子、大久保保江、小澤和子、落合恵子、笠野 大、
上遠野和子、熊倉利子、桑川一江、桑川ひさ、小高真理子、小平哲夫、小平美可、鈴木京子、
寺崎千恵美、藤原美枝、三村恵子、吉葉里美、若泉孝子
（整理作業・報告書作成）
大出美智子、岡田陽子、菅 智子、鶴見里子、矢島早苗

凡 例

1. 遺構の略号は、竪穴住居跡：SI、土坑：SK、溝状遺構：SD、ピット状遺構：S とした。遺構の名称は、発掘調査時に遺構の種別毎検出順に発番した通し番号を用いている。
2. 挿図中の方位は世界測地系に基づいている。
3. 各遺構の縮尺率は原則として 1/60 を基本とし、溝状遺構については 1/240、1/480 を使用している（それぞれ実測図中にスケールで示す）。
4. 遺構実測図に示した断面水準線は、海拔標高でmを表す。
5. 遺構実測図中の遺物番号は、遺物実測図及び遺物観察表の番号と一致する。
6. 遺構・遺物写真図版の縮尺は不統一である。
7. 出土遺物実測図の縮尺は縄文土器を 1/3、石器を 2/3 とした（それぞれ実測図中にスケールで示す）。
8. 遺物観察表中の色調は、『新版標準土色帳』農林水産省農林水産技術会議事務局（1998）に拠った。
9. 遺物観察表中の計測値は、（ ）→復元値を示す。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過と方法	3
第2章 遺跡の環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	11
第3章 発見された遺構と遺物	15
第1節 トレンチ調査と標準土層	15
第2節 縄文時代の遺構と遺物	16
第3節 古墳時代の遺構と遺物	19
第4節 古代の遺構と遺物	19
第5節 近世以降の遺構と遺物	21
第6節 時期不明の遺構と遺物	26
第4章 まとめ	29

挿図目次

第1図 谷向遺跡位置図	1
第2図 谷向遺跡グリッド・トレンチ配置図	4
第3図 谷向遺跡遺構配置図	7
第4図 栃木県地形分類図	9
第5図 周辺地形区分図	10
第6図 周辺の遺跡分布図	13
第7図 標準土層模式図	15
第8図 SI-01 遺構実測図	16
第9図 SI-01 出土遺物実測図	17
第10図 遺構外出土遺物実測図	18
第11図 土坑実測図	20
第12図 土坑・ピット状遺構実測図	23
第13図 溝状遺構実測図	25
第14図 谷向遺跡調査区全体図	30

表 目 次

第1表	平成18年度 確認トレンチ概要	3
第2表	谷向遺跡遺構一覧	8
第3表	周辺の遺跡一覧表	11
第4表	SI-01 出土遺物観察表	17
第5表	遺構外出土遺物観察表	18

図 版 目 次

図版 一 遺構

- 1 遺構確認作業風景
- 2 SI-01 調査風景（南西から）
- 3 SI-01 遺物出土状況（南西から）
- 4 SI-01 遺物出土状況（南東から）
- 5 SI-01 北西部分遺物出土状況（北から）

図版 二 遺構

- 6 SI-01 完掘（南から）
- 7 SK-16 完掘（東から）
- 8 SK-21 完掘（南から）
- 9 SK-23 完掘（南から）
- 10 SD-02 土層断面 D-D'（東から）
- 11 SD-02・03 土層断面 A-A'（北から）
- 12 SD-02・03 土層断面 H-H'（西から）
- 13 SD-02・03 西側 完掘（南から）

図版 三 遺構

- 14 SD-02・03 西側 完掘（北から）
- 15 SD-06 完掘（南東から）
- 16 SD-07 土層断面 I-I'（東から）
- 17 SD-07 土層断面 J-J'（東から）
- 18 SD-07 土層断面 M-M'（北から）
- 19 調査区全景（北東から）
- 20 旧石器トレンチ調査風景
- 21 トレンチ⑤（南側から）

図版 四 遺物

図版 五 遺物

第1章 調査の経緯

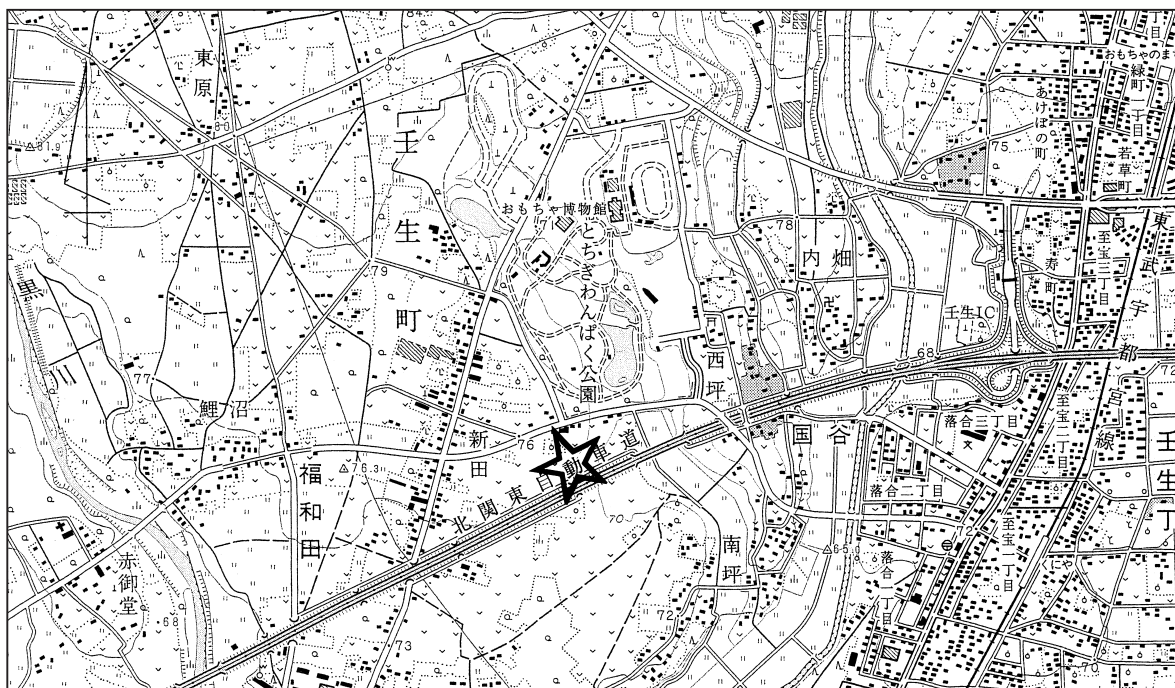
第1節 調査にいたる経緯

北関東自動車道（路線名「北関東自動車道高崎水戸線」）は、群馬県高崎市から茨城県ひたちなか市に至る延長約 150 kmの国土開発幹線自動車道である。群馬、栃木、茨城3県の主要都市並びに国際港常陸那珂港を結ぶとともに、上信越自動車道や中部横断自動車道と一体となり、東京から 100 km～ 150 km圏を環状に結ぶ「関東環状道路」を形成する高速道路である。関東地方における高速道路網の強化により各主要都市の交流の促進や地域の総合的発展の基盤施設としての役割が期待されている。

栃木県内は足利市、佐野市、岩舟町、栃木市、都賀町、壬生町、下野市、宇都宮市、上三川町、真岡市、二宮町の6市5町、約 58 kmを通過する。このうち、東北自動車道（栃木都賀 J.C.T）から新 4 号国道（宇都宮上三川 I.C）までの約 19 kmは優先着工区間とされ、平成 12 年 7 月 27 日に開通している。次いで、宇都宮上三川 I.C から真岡 I.C までの約 8 kmが平成 20 年 3 月 15 日に、真岡 I.C から桜川筑西 I.C までの約 14 kmが平成 20 年 12 月 20 日にそれぞれ開通している。

東北自動車道重複区間及び優先着工区間の両側に位置する上三川～二宮間、足利～岩舟間においては平成 3 年 2 月 8 日都市計画決定、平成 3 年 12 月 3 日基本計画決定、平成 8 年 12 月 27 日整備計画決定をへて、群馬県境～足利は平成 9 年 12 月 25 日、真岡～茨城県境は平成 10 年 4 月 8 日にそれぞれ施行命令が出されている。

日本道路公団東京第一建設局（当時、以下公団）長は施行命令を受け、平成 9 年 7 月 1 日、栃木県土木部高速道路対策室（当時、以下県高対室）を經由し県教育長あて路線内の埋蔵文化財について照会した。そこで栃木県教育委員会事務局文化課（以下県文化課、平成 11 年度より県文化財課）は、平成 9 年 7 月 8 日から



第1図 谷向遺跡 位置図（1：25,000）

第1章 調査の経緯

18日にかけて所在調査を実施した。この調査により周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に上三川～二宮間で14箇所、足利～岩舟間で18箇所の調査必要箇所が確認された。結果は平成10年3月18日付で公団局長あて回答され、あわせて県高対室長あて報告された。

これら調査必要箇所の取り扱いについて、県文化課、公団、県高対室による協議の結果、工事の影響を免れない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。そのため、平成13年1月15日、公団局長、県教育長及び発掘主体者の財団法人とちぎ生涯学習文化財団（以下財団）理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」（以下協定書）が締結された。この協定書において、上記の32箇所について現地発掘調査期間は平成18年3月まで、整理作業・報告書作成期間は平成19年3月まで、費用概算額は2,167,967,000円とされた。また、平成12年度は上三川～二宮間の柳林遺跡、西物井遺跡、峰高前遺跡について調査に着手することとなり、協定書に基づき公団局長及び財団理事長間で「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」が締結され、北関東自動車道上三川～二宮間及び足利～岩舟間の発掘調査が開始された。

その後、財団は文化財課の指導にもとづき発掘調査業務を実施してきたところ、工事予定の変更や新たな埋蔵文化財包蔵地の確認等により協定書中全体実施計画等の見直しが必要となった。そのため、平成18年3月29日付、東日本高速道路株式会社（平成17年10月1日、日本道路公団の民営化に伴い設立：以下東日本高速（株））関東支社宇都宮工事事務所長、県教育長及び財団理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する変更協定書（第1回変更）」が締結された。この協定においては新たに4箇所を加えた36箇所（壬生P.A新規建設に伴う都賀～上三川間、谷向遺跡を含む）について、現地発掘調査は平成23年3月まで、また整理作業・報告書作成は平成24年3月までの期間、費用概算額は3,302,692,000円と変更された。

なお、平成19年3月には、上三川～二宮間における14箇所の現地発掘調査が総て終了した。また、平成20年3月までに足利～岩舟間及び都賀～上三川間における22箇所の現地発掘調査も終了した。整理作業・報告書作成作業においては、総ての遺跡について平成23年度までに報告書を刊行する予定である。

谷向遺跡は壬生町国谷に所在する遺跡で、平成18年度に試掘・確認調査を行い、平成19年度に発掘調査を行った。整理作業・報告書作成は平成20年度に行い、このたび報告書上梓のはこびとなったものである。

各年度の業務を実施した組織は以下の通りである。

調査組織				平成19年度			
平成18年度				埋蔵文化財センター所長			
埋蔵文化財センター所長				篠原 洋			
管理部長				大田原 博			
管理部管理担当 主任				桜井 恭子			
調査部長				川原 由典			
北関東道路調査担当副主幹				初山 孝行			
主査 進藤 敏雄	主査 椎名 聡	主査 仲山 英樹		主査 仲山 英樹	主査 篠原 浩恵	主査 田代 己佳	
主査 中村 享史	主査 伊藤 信二	主査 高野 欽哉		主査 池田 敏宏	主査 合田恵美子	主事 峰崎 武昭	
主査 田代 己佳	主査 江原 英	主査 磯 寿人		嘱託調査員 田村 雅樹			
主任 横田 桂	主任 今平 昌子	主任 亀田 幸久					
主任 吉田 哲	主任 宮田 宣浩	主任 合田恵美子					
主事 峰崎 武昭							
嘱託調査員 田村 雅樹	玉橋さやか	鈴木 芳英					
調査補助員 長濱 健一	村田 沙織						
				平成20年度			
				埋蔵文化財センター所長			
				会沢 登			
				管理普及部長			
				安西 和雄			
				管理部管理担当 主査			
				桜井 恭子			
				調査部長			
				川原 由典			
				北関東道路調査担当副主幹			
				藤田 典夫			
				主査 仲山 英樹	主査 篠原 浩恵	主査 田代 己佳	
				主査 池田 敏宏	主査 吉田 哲		

第2節 調査の経過と方法

平成18年度

(確認調査) 平成19年2月1日～平成19年3月31日 調査面積：3,552 m²

谷向遺跡は壬生町国谷の台地上に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。遺跡は恵川右岸の福和田台地面に立地し、東側は恵川支流の開析した谷へ至る斜面となる。谷を挟んだ東側の台地には国谷馬場・中の内遺跡が所在する。北関東自動車道本線部分は、1996年に調査が行われ、古代の住居跡1軒、火葬墓1基、側壁挟込土坑墓2基、時期不明の土坑6基が確認されている。また北東側にある壬生総合公園内の南西一部も谷向遺跡範囲内で、弥生時代の住居跡1軒、古墳時代の方形周溝墓2基等が1996～1998年に調査されている。今回確認調査の対象となったのは北関東自動車道の南北両側の範囲で、調査対象面積 41,964 m²のうち約9%にあたる 3,552 m²の確認調査を行った。

〔調査概要〕

今回の調査は、対象箇所の地形や土地形状にあわせてトレンチを設定し、重機により遺構の有無が確認できる深さまで掘り下げ、掘削したトレンチの底面、断面を精査し土層の観察や遺構の検出状況を確認した。概ね5層としたローム層上面まで掘り下げを行ったが、一部のトレンチでは4層のローム漸移層上面で確認を行った。

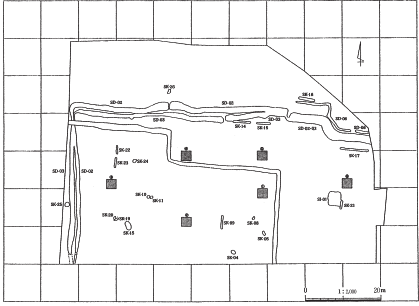
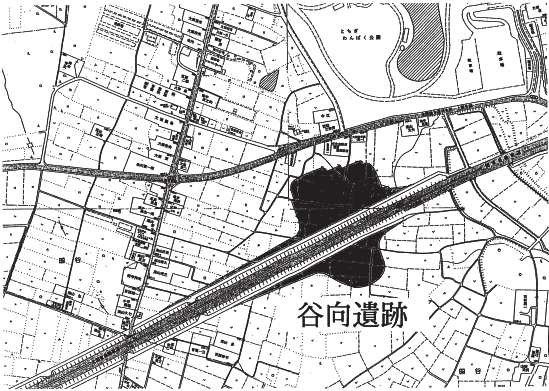
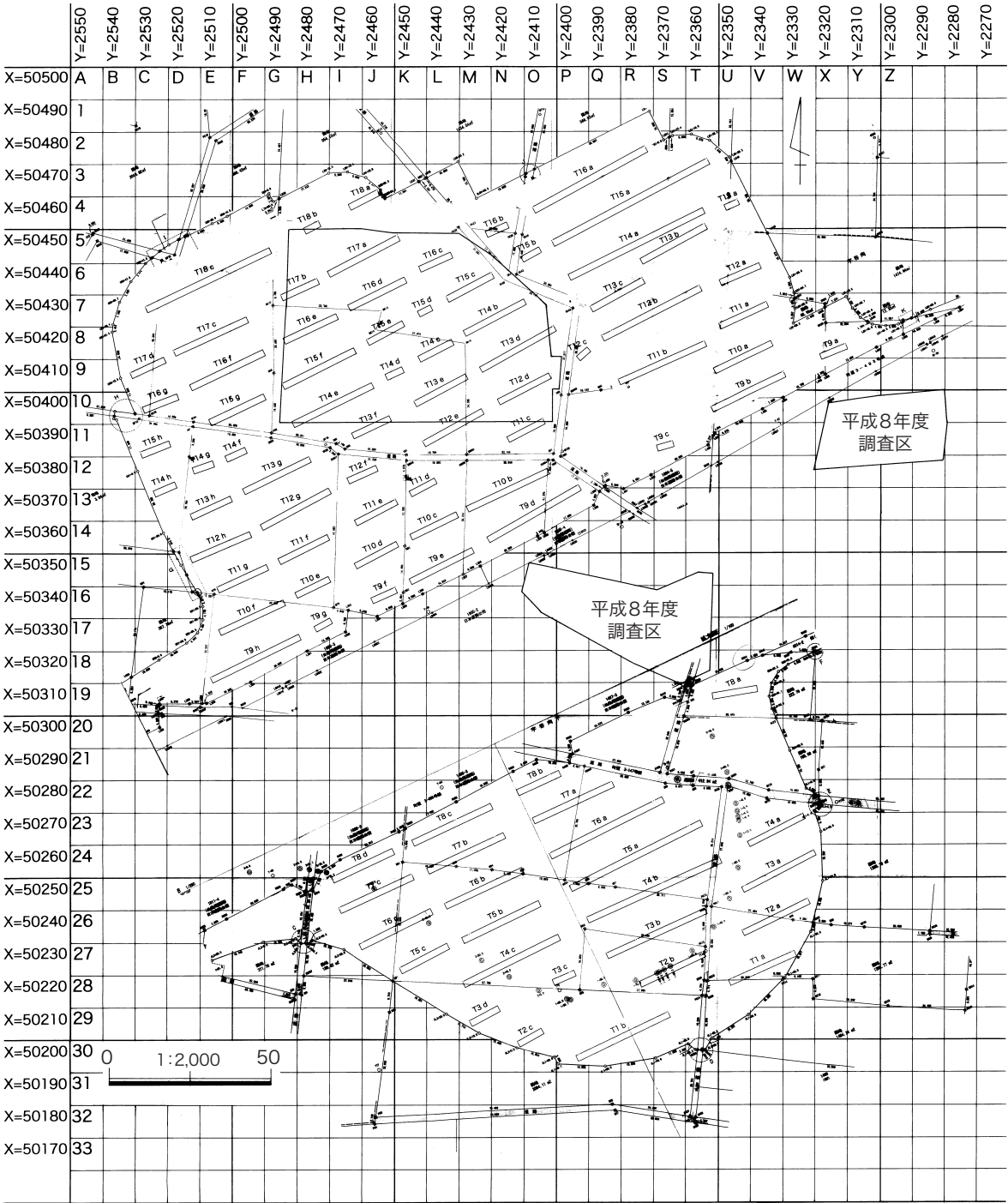
第1表 平成18年度 確認トレンチ概要

トレンチ名	幅 (m)	長さ (m)	面積 (m ²)	深さ (m)	調査結果
1	2	52	104	0.4	遺構・遺物なし
2	2	52	104	0.2	遺構・遺物なし
3	2	74	148	0.3	土坑1基・ピット1基確認
4	2	92	184	0.3	遺構・遺物なし
5	2	87	174	0.3	遺構・遺物なし
6	2	88	176	0.3	遺構・遺物なし
7	2	77	154	0.3	遺構・遺物なし
8	2	75	150	0.3	遺構・遺物なし
9	2	138	276	0.7	遺構・遺物なし
10	2	105	210	0.7	遺構・遺物なし
11	2	114	228	0.6	ピット2基確認
12	2	142	284	0.6	土坑1基確認
13	2	137	274	0.6	ピット2基、溝1条確認
14	2	136	272	0.6	土坑1基、溝2条確認
15	2	146	292	0.6	土坑1基、溝2条確認
16	2	132	264	0.5	ピット1基、溝1条確認
17	2	73	146	0.6	溝1条確認
18	2	56	112	0.5	遺構・遺物なし
計		1,776	3,552		溝3条、土坑4基、ピット6基

※深さは、台地平坦面での平均的な深さ。

遺構数合計で、溝の条数はトレンチ間に同一の溝が続くと推定して計数。

第1章 調査の経緯



第2図 谷向遺跡 グリッド・トレンチ配置図

調査実施箇所では、水田として使われていた場所も含め、ゴボウ耕作に伴う攪乱が著しいが、殆どのトレンチでローム層は遺存していることが確認された。なおT12b区西端において、ローム層の堆積を確認する深掘り調査を行った。

〔調査結果〕

設定したトレンチ18本の内、遺構が確認されたのは8本である。

北関東自動車道南側の地点（T1～T8）では、T3で土坑1基、ピット1基が確認されたのみである。ピットは径60cm、深さ70cmである。

北関東自動車道北側の地点（T9～T18）では、調査範囲ほぼ中央のT11～T17で遺構が確認された。T15～T17にかけて確認された溝は、T17b区でほぼ直角に曲がるもので、ローム層より上位の層を切って作られている。T12～T15で確認された溝も、ローム層より上位で耕作土直下から掘り込まれている。T11～T16では、土坑3基・ピット5基が確認されている。

トレンチ内の遺物は、T3の土坑から出土した時期不明の鉄製品1点のみであり、これ以外の調査トレンチ内から遺物はまったく出土していない。また、トレンチ外の調査対象範囲内でも、微細な土器小片がわずかに採集できたのみである。

以上の調査結果から、北関東自動車道北側の対象範囲のうち、ほぼ中央から東側にかけての台地から斜面部分で遺構、遺物の発見される可能性が推定された。

平成19年度

（本調査）平成19年4月1日～平成19年6月30日 調査面積： 8,700 m²

平成18年度に実施された確認調査に続いて、パーキング建設箇所を対象として調査を行った。台地平坦部から斜面部に移行する箇所からは縄文時代中期後半の竪穴住居跡1軒が発見された。その他、遺構外になるものの、縄文時代早期と推定される石器が出土している。また、19基の土坑、4条の溝跡を調査した。遺構の時期は近世ないし近世以降の時期と推定された。なお、近辺の遺跡から旧石器時代の遺物が出土していることからローム層の掘り下げを行ったものの、特に遺構、遺物は確認されなかった。

平成20年度

（整理・報告作業）平成20年10月1日～平成21年3月30日

埋蔵文化財センターにおいて、平成18～19年度の発掘調査により出土した遺物、および遺構の実測図等の各記録資料類を整理し、成果を報告書にまとめ印刷物として刊行する作業を以下の通り行った。

（1）出土遺物洗浄

遺物についている土をブラシで水洗いして洗浄する作業。

（2）出土遺物注記

出土したすべての遺物1点1点に、遺跡名・出土地点などの調査データを書き込む作業。

（3）出土遺物接合・復元

遺物の破片をつなぎ合わせ破損する前の形に戻していき、石膏や樹脂などを補充して復元する作業。

（4）出土遺物分類・選別

接合作業の終了した遺物を種別・器種・部位別に分類し、遺構毎の出土遺物の調査データを収集し記録する作業。

また、図面化して報告書に掲載する遺物を選出し、遺物観察表を作成する作業。

（5）出土遺物実測

「接合・復元」「分類・選別」の終わった遺物のなかから、報告書に図示する遺物を選出して、器形や文様・製作技法の特徴を約束事に従って図化する作業。

第1章 調査の経緯

(6) 遺物観察表作成

報告書に図示する遺物の器形や文様・製作技法の特徴を観察し、図化した実測図に対応するよう作表する作業。

(7) 写真整理

現場で撮影した写真と撮影記録を併せて整理する作業。

(8) 遺構平面図整理作業（第二原図作成）

現場で記録した実測・測量図を整理・修正し、他の記録類と整合させる作業。

また、これらを基に調査報告書に必要な図面資料やトレースの下図になる第二原図を作成する作業。

(9) 遺構事実記載

調査を行った遺構の計測値や、収集した調査データから、遺構の性格や特徴を文書化し、記録する作業。

(10) 遺物実測図・遺構平面図トレース作業

報告書に掲載する図版の版下用に、整理・修正の終了した各測量図を指定した約束事に基づいて清書する作業。

(11) 図版作成

報告書に掲載する遺構・遺物の実測図について、トレース作業の終了した測量図のパーツをレイアウトし、必要な文字・記号等のレタリングやトーンの貼り込みを行い、印刷できる状態の版下に仕上げる作業。

(12) 掲載遺物写真撮影

報告書に写真を掲載する遺物を選出し、特徴を表現できる必要なカットで遺物を撮影する作業。

(13) 原稿執筆・編集

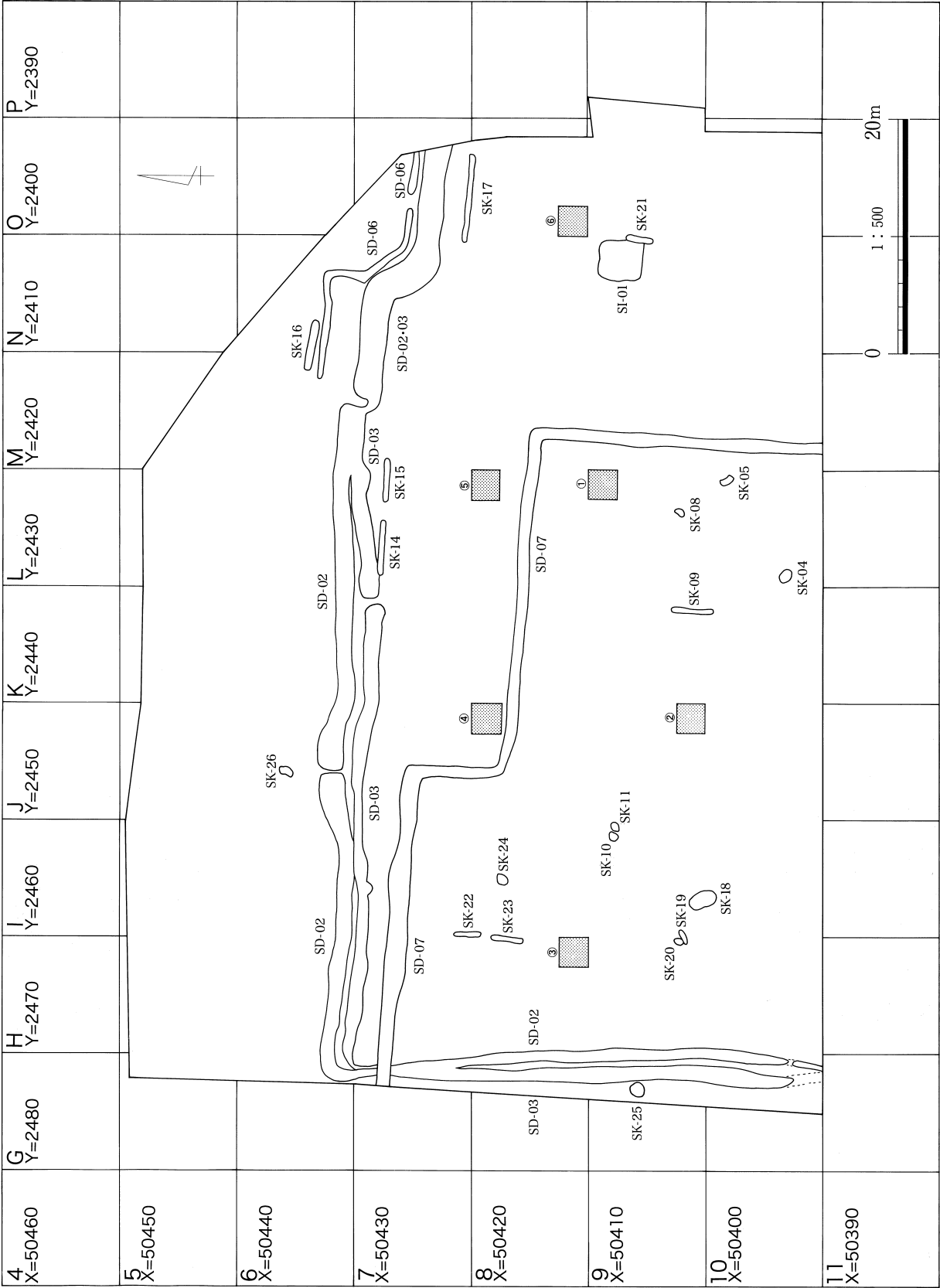
調査された遺構及び出土した遺物を細説する報告書用の原稿（本文・表等）を執筆し、作成した完成図版と併せて編集し、報告書の体裁を整える作業。

(14) 校正及び報告書刊行

完成した原稿及び挿図・表・写真等の各レイアウトをもとに、報告書の印刷・製本を発注し、仕上がりについて校正を重ね、報告書として刊行させる作業。

(15) 遺物・記録資料類の再整理と収納

報告書刊行後において、出土遺物や記録図面・写真等の埋蔵文化財調査資料を保管収蔵するための再整理を行い、各資料に所定の表示を付し、収蔵用の台帳類等をそれぞれ完備する作業。



第3図 谷向遺跡 遺構配置図

第1章 調査の経緯

第2表 谷向遺跡 遺構一覧

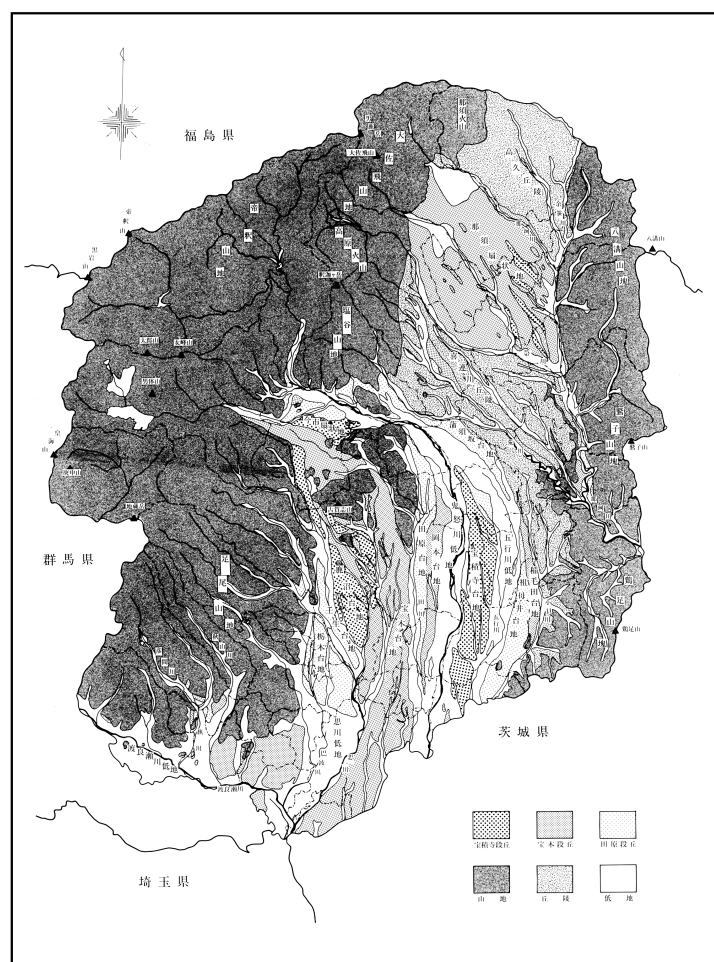
遺構番号	種 類	グリッド	実測図(遺構)	実測図(遺物)	写真(遺構)	写真(遺物)
SI - 01	竪穴住居跡	N-9	第8図	第9図	図版一・二	図版四・五
SK - 04	土坑	L-10	第11図	-	-	-
SK - 05	土坑	L-10	第11図	-	-	-
SK - 08	土坑	L-9	第11図	-	-	-
SK - 09	長方形土坑	K-9・K-10	第11図	-	-	-
SK - 10	土坑	I-9	第11図	-	-	-
SK - 11	土坑	I-9	第11図	-	-	-
SK - 14	長方形土坑	L-7	第11図	-	-	-
SK - 15	長方形土坑	L-7・M-7	第11図	-	-	-
SK - 16	長方形土坑	M-6・N-6	第11図	-	図版二	-
SK - 17	長方形土坑	N-7・O-7・O-8	第12図	-	-	-
SK - 18	土坑	I-10	第11図	-	-	-
SK - 19	土坑	H-9・I-9	第12図	-	-	-
SK - 20	土坑	H-9	第12図	-	-	-
SK - 21	長方形土坑	N-9	第12図	-	図版二	-
SK - 22	長方形土坑	I-7・I-8	第12図	-	-	-
SK - 23	長方形土坑	H-8	第12図	-	図版二	-
SK - 24	土坑	I-8	第12図	-	-	-
SK - 25	土坑	G-9	第12図	-	-	-
SK - 26	土坑	J-6	第12図	-	-	-
S - 01	ピット状遺構	R-26 (トレンチ3b)	第12図	-	-	-
S - 02	ピット状遺構	R-26 (トレンチ3b)	第12図	-	-	-
SD - 02	溝状遺構	G-10～O-7	第13図	-	図版二・三	-
SD - 03	溝状遺構	G-10～O-7	第13図	-	図版二・三	-
SD - 06	溝状遺構	M-6～O-7	第13図	-	図版三	-
SD - 07	溝状遺構	G-7～M-10	第13図	-	図版三	-

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

栃木県は、本州の中央にあたる関東平野の北部、いわゆる北関東の中央部にあり、北を福島県、西を群馬県、南を群馬県と埼玉県、東を茨城県と接する内陸県である。東西に 75 km、南北に 98 km、面積およそ 6,400 km² の南北にやや長い楕円形をなしている。

地形的には東部山地、中央部平地、西部山地の三地形区に大別できる。東部山地は福島県・茨城県との県境に沿って南北に走るいわゆる八溝山地で、北端の八溝山を主峰にもつ八溝山塊から、南に向かって鷲子山地、鶏足山塊とその標高は段階的に低くなる。中央部平地は丘陵・台地・低地から成り、北から高久（白河）丘陵、那須扇状地（那須野が原）、喜連川（塩那）丘陵、宇都宮市を中心とする県中南部の台地・低地と並ぶ。西部山地は北から帝釈山地、足尾山地が連なり、その間に那須火山・高原火山・日光火山の各火山群が位置する。以上の三地形区はいずれも北から南へ向かって緩斜する傾向を示しており、そのため県の主要河川である鬼怒川を始め那珂川・思川、また、鬼怒川の支川である五行川・田川・姿川・黒川などの各河川はそろって北から南へ流下する。これらの河川はそれぞれ沖積低地を形成し、間に台地が南北に平行して並ぶ。全体として南に開けた、北岳南平の地となっている。

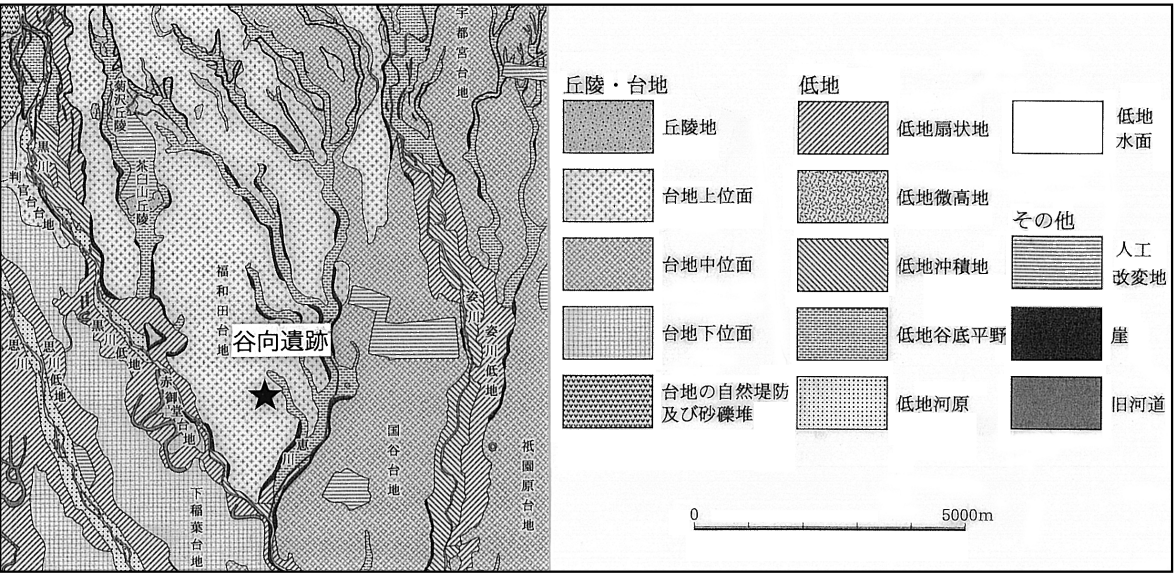


第4図 栃木県地形分類図

気候は内陸性気候であるが、地域的には東北日本と南西日本、裏日本と表日本の中間にあつて中位性を示し、表日本型の温暖で冬乾燥・夏多湿（関東平野型）の気候から、裏日本型が一部入り込む低温で冬多雪・夏多雨（関東周辺山地型）の気候まで多様である。県の東・西・北が山地で囲繞されているため、日中の最高気温は高く、冬及び朝の最低気温は低い。植物帯としては、県域南部は暖温帯照葉樹林帯、宇都宮の北東部・那須にかけては暖温帯落葉樹林帯、西部山岳帯の大部分が冷温帯落葉樹林帯となる。県央をほぼ横断する年平均気温 13℃の線が暖帯性植物の北限とされ、このため栃木県は日本の植生の南北境界に位置することになる。

谷向遺跡は下都賀郡壬生町国谷地内に所在する。壬生町は栃木県の県央南部に位置し、国谷はその中央部にあたる。

北は鹿沼市・宇都宮市、西は西方町・



第5図 周辺地形区分図

都賀町・栃木市、南と東は下野市と接しており、町の西境を思川、中央部を黒川、東境沿いを姿川が南流し、町の南端で黒川と思川が合流する。関東平野の北部に当たる海拔 50 ～ 100m のほぼ平坦な地形で、特産物である干瓢は江戸時代から栽培され、野州干瓢の発祥の地として認められる。近年は「とちぎの女峰・とちおとめ」で知られる苺栽培が盛んである。

本遺跡は恵川と黒川に挟まれた福和田台地と呼ばれる洪積台地に立地する。福和田台地は鹿沼台地の一部で台地上位面にあたり、比較的平坦面を多く残す。台地縁辺部は小規模な浸食谷が形成され、枝状に入る浸食谷の谷頭では遊水池が見られる。本遺跡はこの台地東縁に位置し、国谷字新田地内に湧水点を持つ浸食谷に面する。

本遺跡で報告する谷向遺跡は、壬生 P.A 新規建設に伴う都賀～上三川間の新規調査であるが、北関東自動車道（都賀～上三川）建設に伴う優先着工区間の調査として平成 8 年度に調査が行われた本線部分の南側にあたる。さらに同台地上の北側に続く部分は壬生総合公園整備に伴う調査として平成 9 年度に調査が行われている。

参考文献

阿久津純 1976「栃木県の地形・地質（県中南部を中心に）」『栃木県史』資料編考古2 栃木県史編纂委員会
安藤美保 2001『谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 255 集 栃木県教育委員会(財)
とちぎ生涯学習文化財団
池田敏宏 1999『台畑遺跡・谷向遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第 223 集 栃木県教育委員会(財) 栃木県文化振興事業団
大町雅美ほか編 1984『角川日本地名大辞典 9 栃木県』 角川書店 角川日本地名大辞典編纂委員会
国土庁土地局国土調査課 1991『土地分類図 09 (栃木県) 1974』復刻版 財団法人日本地図センター
下中直也 1988「栃木県の地名」『日本歴史地名大系』第九巻 平凡社
篠原浩恵 2003『霞内西遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第 275 集 栃木県教育委員会(財) 栃木県文化振興事業団
栃木県企画部土地対策課 1984『土地分類基本調査 壬生』
栃木県企画部統計課 1991『栃木県統計年鑑』平成 2 年版
壬生町史編さん委員会 1990『壬生町史』通史編 I 壬生町

第2節 歴史的環境

谷向遺跡は壬生町に所在する。壬生町の歴史は古く、壬生氏によって壬生城が築かれ、最後の城主鳥居氏が明治維新を迎えるまで、壬生城の城下町や日光街道の宿場町、また黒川を利用した河川交通の要衝として栄えた。原始・古代においても多くの人々が暮らしていた痕跡が遺跡の調査によって解明されつつある。

ここで、近年に発掘調査された調査事例を中心に、周辺地域の遺跡を時代毎に概説する。

旧石器時代
たにむこう
谷向遺跡（以下「本遺跡『1a』」）は、北西方向に発達した浸食谷に向かって穏やかに傾斜する台地縁辺部にあり、同台地上の北側は平成8年度に北関東自動車道（都賀～上三川）建設に伴う優先着工区間の調査として（以下「H8谷向遺跡『1b』」）、また平成9年度にも壬生総合公園整備に伴う調査として（以下「H9谷向遺跡『1c』」）発掘が行われている。

周辺地域で知られる旧石器時代の遺跡は少ないが、本遺跡の低地を挟んだ東側で平成8・9年度に調査された壬生町国谷の恵川支谷台地上に位置する国谷馬場遺跡『2』からは4カ所の旧石器ブロックが確認され、ナイフ形石器の未製品が出土している。このため、本遺跡でもローム層の掘り下げ調査を行い、旧石器時代の遺構・遺物の確認を行ったが当該期に係わるものは確認されなかった。ほかに旧石器の遺物が発見された遺跡として、ナイフ形石器が出土する壬生町羽生田の黒川西岸（下流に向かって見た方向で記す。以下右岸も同様。）台地上に位置する御新田遺跡『71』と、同じく壬生町羽生田の黒川西岸台地上に位置する下坪遺跡『84』がある。

第3表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1 (a・b・c)	谷向遺跡	22	藤井51号墳	44	明城古墳群	66	藤江東原古墳群
2	国谷馬場遺跡	23	吾妻古墳	45	大明神遺跡	67	茶臼山古墳
3	中の(之)内遺跡	24	吾妻遺跡	46	磯遺跡	68	富士山古墳
4	八剣遺跡	25	星の宮神社古墳	47	霞内西遺跡	69	富士下遺跡
5	落合B遺跡	26	上大領東原古墳群	48	山の神遺跡	70	三島遺跡
6	膳棚A遺跡	27	児山城	49	中丸遺跡	71	御新田遺跡
7	車塚3号墳	28	下古山古墳群	50	助谷館跡	72	ヤッチャラ遺跡
8	壬生車塚古墳	29	長田塚古墳	51	藤岡館跡	73	富士前遺跡
9	牛塚古墳	30	惣宮遺跡	52	北小林館跡	74	北原古墳群
10	銭測遺跡	31	文殊山遺跡	53	三ツ谷館跡	75	桃花原古墳
11	壬生愛宕塚古墳	32	女夫塚古墳	54	下原B遺跡	76	長塚古墳（新郭古墳群）
12	壬生城	33	長田古墳群	55	中泉87番地	77	新郭遺跡
13	愛宕神社古墳	34	上長田館跡	56	上田遺跡	78	下り遺跡
14	田中前遺跡	35	ナナシ塚古墳	57	山崎古墳群	79	羽生田城
15	天神前A遺跡	36	内屋敷古墳群	58	上田浅間塚古墳	80	六反田古墳
16	稻荷内遺跡	37	内畑遺跡	59	朝比奈館跡	81	本学谷古墳群
17	藤井古墳群	38	塚越古墳群	60	安塚坂下遺跡・古墳群	82	本学谷東遺跡
18	藤井城	39	明城遺跡	61	坂下古墳群	83	下坪古墳群
19	藤井34号墳	40	国谷館	62	亀塚古墳	84	下坪遺跡
20	清治久保A遺跡	41	狐塚古墳	63	上原古墳群	85	本山古墳群
21	藤井38号墳	42	台畑遺跡	64	上田城	86	峯古墳群
		43	聖地公園内遺跡	65	大力遺跡		

第2章 遺跡の環境

縄文時代

本遺跡では縄文時代の竪穴住居跡が一軒確認されており、加曽利 EIV式の遺物が出土する。周辺の地域では、壬生町国谷の恵川支谷台地上に位置する明城遺跡〔39〕では中期の住居跡1軒が、壬生町国谷の恵川支谷台地上に位置する聖地公園内遺跡〔43〕では後期の住居跡1軒が、壬生町羽生田の黒川左岸に位置する新郭遺跡〔77〕では早期から後期の集落が確認されている。また、壬生町福和田の黒川左岸台地上に位置する八剣遺跡〔4〕では後期～晩期の大集落が調査されている。陥し穴状土坑は壬生町国谷の恵川支谷台地上に位置する中の内遺跡〔3〕で1基、壬生町助谷の恵川支谷台地上に位置する霞内西遺跡〔47〕と聖地公園内遺跡で3基、壬生町国谷の恵川東岸台地上に位置する台畑遺跡〔42〕で12基が確認されている。

弥生時代

H9 谷向遺跡からは、中期後半の住居跡が一軒検出している。御新田遺跡では中期の住居跡が、新郭遺跡で中期から後期の集落が確認されている。また、台畑遺跡でも中期の竪穴住居跡が一軒、霞内西遺跡では後期の遺物が出土している。

古墳時代

周辺域で確認される古墳時代前期の遺構数は少なく、調査された集落の規模はいずれも小さい。確認された竪穴住居跡の検出数は、八剣遺跡の12軒と台畑遺跡の11軒が最も多く、本地域の前期集落では最大規模となる。ほかには竪穴住居跡数件という事例が多く、中の内遺跡、壬生町落合の恵川西岸台地上に位置する落合B遺跡〔5〕、霞内西遺跡、明城遺跡などが挙げられる。H9 谷向遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓が2基確認されている。台畑遺跡、霞内西遺跡、明城遺跡などでは前期に続いて中期の住居跡も確認される。中期の古墳は前期に続いて少ない。壬生町国谷の恵川支谷台地上に位置する塚越古墳群〔38〕は円墳3基からなる。後期に入ると古墳築造の増加に伴って集落の規模も大きくなる。石橋町下長田の姿川東岸台地上に位置する惣宮遺跡〔30〕では後期の住居跡20軒が確認される。ほかに後期の集落として、石橋町上古山の姿川西岸台地上に位置する文珠山遺跡〔31〕、壬生町上田の恵川支谷台地上に位置する大力遺跡〔65〕、新郭遺跡、国谷馬場遺跡、中の内遺跡などが調査されている。近年の調査で大きな成果を上げている壬生町藤井の黒川左岸台地上に位置する吾妻古墳〔23〕は、後期の大規模な群集墳である藤井古墳群〔17〕の主墳であり、県内最大の前方後円墳となる。古墳時代終末期の所産であるとされる壬生町羽生田の黒川左岸に位置する桃花原古墳〔75〕は三段築成の円墳で、発掘調査により県内で初めて前庭施設が立体的に確認された。

奈良・平安時代

本遺跡の所在する壬生町は、律令制下において下野国九郡のうち都賀郡の管轄下にあった。都賀郡には下野国府が置かれ、地方行政の中心となった。壬生町田村町の思川右岸に位置する国府跡は発掘調査によりその詳細が報告されており、国指定史跡として整備されている。今回の本調査区では当該期の遺構は検出せず、平成18年度の確認調査時において古代の堀立柱建物跡の一部ではないかと思われる柱穴跡を確認したのみである。H8 谷向遺跡では1軒の竪穴住居跡のみ確認されている。周辺域では中之内遺跡、惣宮遺跡、壬生町藤井の黒川左岸台地上に位置する吾妻遺跡〔24〕、壬生町壬生の黒川左岸に位置する銭淵遺跡〔10〕などで集落が確認されている。

中・近世

当地域には壬生胤業を祖とする壬生氏により築城された壬生城があり、小山氏と宇都宮氏両勢力の境線地域に所在した。壬生町壬生の黒川東岸台地上に位置し、発掘調査の結果15世紀後半から17世紀前半代にかけての変遷が確認されている。集落遺跡の調査事例としては平安後期から中世にかけて火葬墓や地下式墳、



第6図 周辺の遺跡分布図 (1:50,000)

第2章 遺跡の環境

側壁挟込土坑など、墓壙として利用された遺構の検出数が増える。中の内遺跡では地下式壙と土壙墓からなる中世の墓域が確認されている。長方形の形態をとる土壙墓は、特に近世において貯蔵用の土坑との判別が難しく、明らかに墓壙とする記述は少ない。今回の谷向遺跡の調査でも近世のものと思われる長方形土坑が7基確認されるが、性格は不明である。

参考文献

安藤美保 2001『谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 255 集 栃木県教育委員会 (財)とちぎ生涯学習文化財団

池田敏宏 1999『台畑遺跡・谷向遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 223 集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団

岩崎浩恵・池田敏宏 1996「中之内遺跡」『道路改良工事地内所在遺跡発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 184 集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団

内山敏行 1998『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 214 集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団

君島利行 1991「聖地公園内遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』栃木県教育委員会

君島利行 1995『明城遺跡』壬生町埋蔵文化財報告書第 13 集 壬生町教育委員会

君島利行 1998『富士山古墳』壬生町埋蔵文化財報告書第 14 集 壬生町教育委員会

君島利行 2001『藤井古墳群』壬生町埋蔵文化財報告書第 17 集 壬生町教育委員会

君島利行 2005『国指定史跡 愛宕塚古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第 20 集 壬生町教育委員会

君島利行 2006『桃花原古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第 21 集 壬生町教育委員会

君島利行 2006『車塚3号墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第 22 集 壬生町教育委員会

篠原浩恵 2003『霞内西遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 275 集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団

栃木県史編纂委員会 1979『栃木県史』資料編 考古二

栃木県史編纂委員会 1981『栃木県史』通史編 I 原始古代一

中村享史 1996『安塚坂下古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 172 集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団

中山晋・稲葉輝雄 1983『藤井古墳群発掘調査報告-44・45号墳-』壬生町埋蔵文化財報告書第 3 集 壬生町教育委員会

橋本澄朗・上野修一・鈴木元・塚本師也・平久保直希・合田恵美子・玉橋さやか 2001『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 254 集 栃木県教育委員会 (財)とちぎ生涯学習文化財団

細谷正策・尾花源司 1987『御新田遺跡 富士前遺跡 ヤッチャラ遺跡 下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 85 集 栃木県教育委員会

壬生町史編さん委員会 1990『壬生町史』資料編 原始古代・中世 補遺 壬生町

壬生町史編さん委員会 1990『壬生町史』通史編 I 壬生町

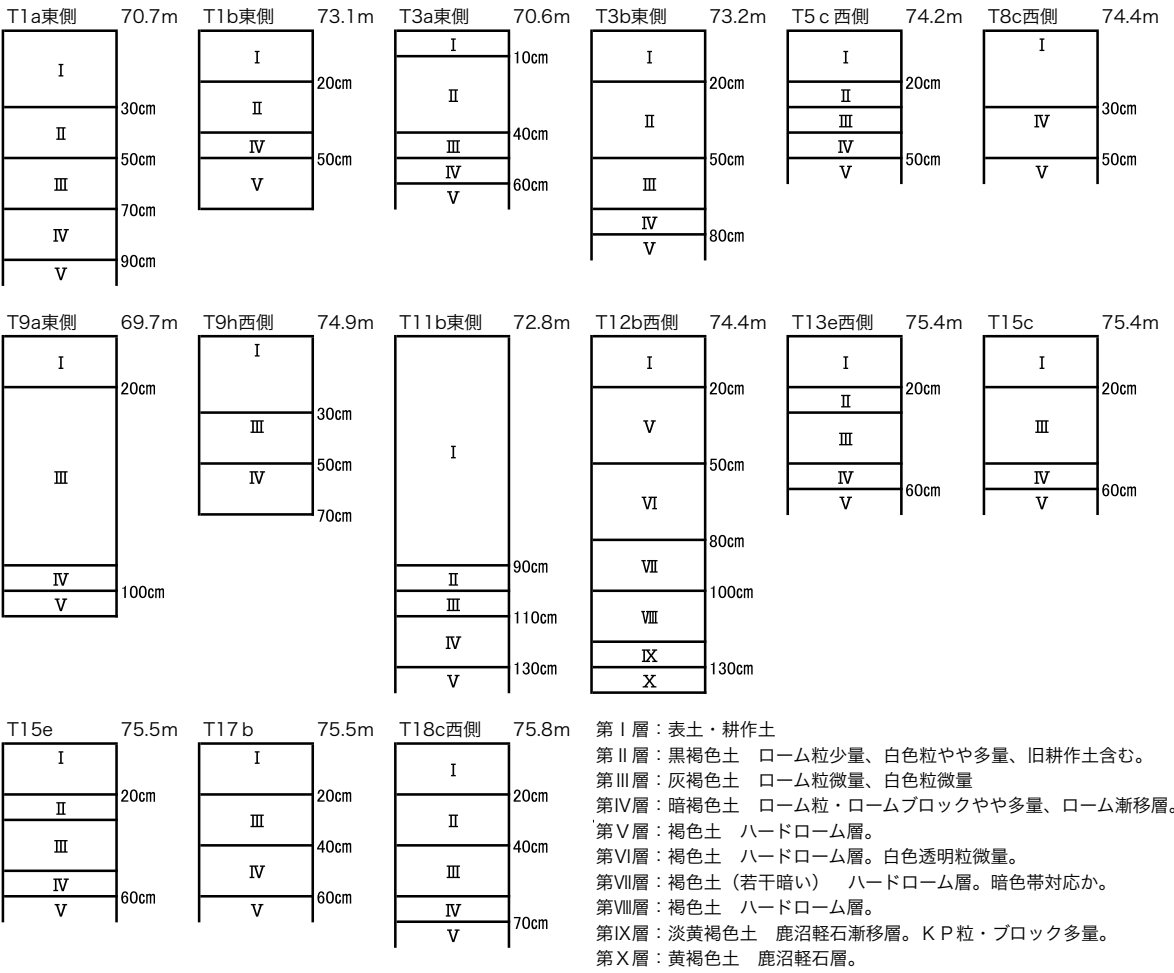
壬生町歴史民俗資料館 2001『壬生町遺跡分布調査報告』壬生町埋蔵文化財報告書第 16 集 壬生町教育委員会

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 トレンチ調査と標準土層

谷向遺跡の標準土層は平成18年度に行われたトレンチ調査時に確認した（第7図）。谷向遺跡は浸食谷に面する台地東縁にあり、北西から南東 π 方向に傾斜するため、最東にあるトレンチ9aの確認地点が遺跡内で最も低い地点となる。トレンチ12bにおいて最も深く掘削し、鹿沼軽石層まで確認している。鹿沼軽石層は、群馬県の赤城火山を給源火山（更新世約3万年前）とし、約1mの厚さで堆積する。鹿沼土と通称され、園芸用として市内各地で採掘される。3層からなる栃木県の関東ローム層の中位層である宝木ローム層のなかにあり、上位の田原ローム層とは暗色帯で分かれる。

平成19年度の調査では、近辺の遺跡で旧石器時代の遺物が出土していることから対象地点において、2.5m四方のグリッドを設定し（第3図）ハードローム面までローム層の掘り下げを行い、旧石器時代の遺構・遺物の確認に努めた。しかし、この調査の結果、特に遺構、遺物は確認されなかった。



第7図 標準土層模式図

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

谷向遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡が一軒確認されている。他に縄文時代の遺構は検出せず、単独的に位置する。住居跡の時期については、出土した遺物から加曽利EⅣ式期に属するものと判断した。

SI-01（第8・9図、第4表、写真図版一・二・四・五）

位置 調査区東部のN-9グリッドに位置する。南東方向に緩やかに下がる緩斜面上にある。

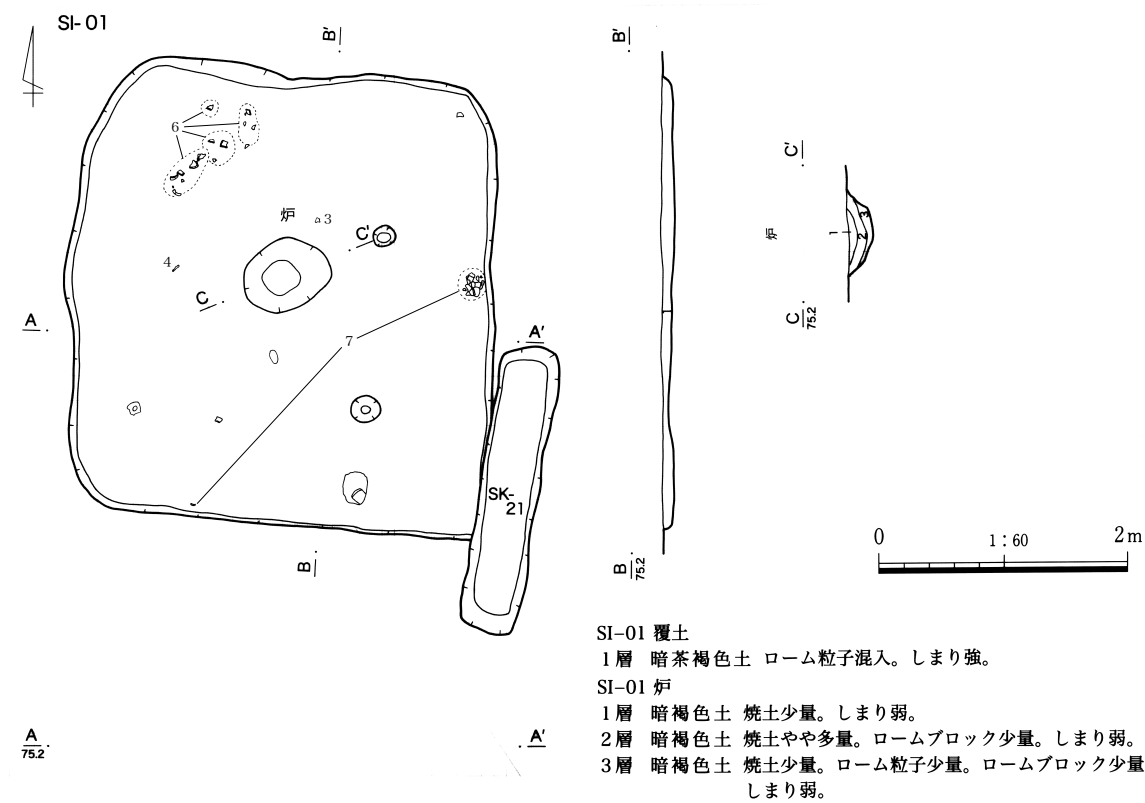
重複・新旧 重複する長方形土坑（SK-21）によって南東の隅をわずかに壊される。

規模・形状 南北約3.7m、東西約3.4mの隅丸方形を呈する。

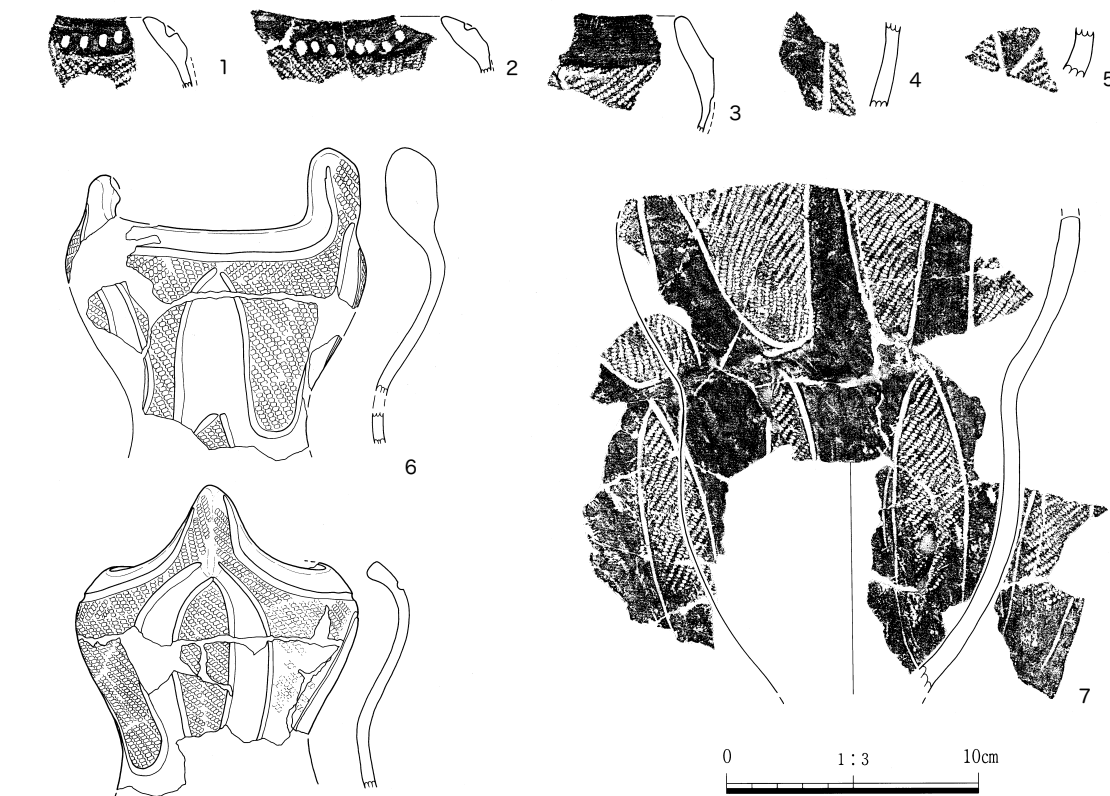
主軸方向 主軸方向は炉のある位置を中心にして、辺の整っている南壁に直交する方向で、N-05°-Eの向きをとる。

壁・床 確認面から床面までの深さは8～12cm。壁は、南壁は概ね垂直に、北・西・東壁はやや緩やかな角度で立ち上がる。床面は若干凹凸があるものの概ね平坦で高低差はほとんどない。硬化面は特に見られず、貼り床の形跡も観察されない。

柱穴 東側に長軸約19cm×短軸約17cmと、長軸約24cm×短軸約22cmの不整楕円形のピット状の浅い掘方が見られた。当初、竪穴住居跡に伴う柱穴ではないかと精査を行ったが、覆土はしまりのない黒褐色土で、縄文時代の覆土とは異なることから、本遺構に伴う柱穴ではないと判断された。後世の攪乱であると思われる。



第8図 SI-01 遺構実測図



第9図 SI-01 出土遺物実測図

第4表 SI-01 出土遺物観察表

No.	種別	器種	法 量	色 調		胎 土	焼成	特 徴	遺存率	出土状態
				内	外					
1	縄文土器	深鉢	残存高：2.9cm	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR3/1黒褐色	微砂粒少量、黒色粒子、赤色粒子含む	やや良好	肥厚・内湾する口縁部には楕円形の刺突が巡る。低い微隆起線による区画内には2段RLを縦位・横位に施文する。No.2と同一固体か。	破片	覆土
2	縄文土器	深鉢	残存高：2.3cm	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄褐色	微砂粒少量、黒色粒子、赤色粒子含む	やや良好	肥厚・内湾する口縁部には楕円形の刺突が巡る。低い微隆起線による区画内には2段RLを縦位・横位に施文する。No.1と同一固体か。	破片	覆土
3	縄文土器	深鉢	残存高：4.6cm	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	砂粒やや多量、白色粒子・赤色粒子少量含む	良好	無文の口縁部は入念に磨かれる。微隆起線による区画内に、2段LRを横位施文する。	破片	No.14(床上約7cm)・覆土
4	縄文土器	深鉢	残存高：3.8cm	10YR4/2灰黄褐色	7.5YR7/6橙色	砂粒やや多量、少量の白色粒子含む	やや良好	太めの沈線による磨消縄文が見られる胴部破片。原体は2段LRの縄を縦位施文する。No.7と同一固体か。	破片	No.7(床上約4cm)
5	縄文土器	深鉢	残存高：2.5cm	2.5Y3/1黒褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	微砂粒、少量の黒色粒子、赤色粒子含む	やや不良	太めの沈線による磨消縄文が見られる胴部破片。2段LRを縦位または斜位に施す。	破片	覆土
6	縄文土器	深鉢	最大径：(長軸)11.9cm (短軸)11.2cm 残存高：12.4cm	10YR3/1黒褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	微砂粒、黒色粒子含む	やや良好	玉抱文が見られる小型土器。上面から見ると楕円形を呈し、その長軸には大小の突起を持つ。縄文原体は2段LRで、主に縦方向に施す。器面は入念に磨かれ、全面に炭化物が付着する。EIV式古段階の土器か。	口縁部～胴部上半4/5	No.2・3・5・4(床上約2.5～8.5cm)・覆土
7	縄文土器	深鉢	最大径：18.4cm 残存高：20.7cm	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	微砂粒、黒色粒子含む	良好	口縁部を欠損するため不明瞭だが玉抱文の土器と考えられる。沈線区画後に縄文(縦位の2段RL)を充填する。内外面ともに入念に磨かれ、外面の上半部には炭化物が付着する。	胴部1/3	No.1・10(床上約2～3cm)・覆土

第3章 発見された遺構と遺物

炉 住居の中央やや北寄りに位置する地床炉である。長軸 70 cm、短軸 55 cmの北東～南西方向に長軸を有する不整楕円形の掘方で、深さは床面から 20 cmである。底面は強い比熱により硬化する。覆土の上位と下位に見られる焼土は少ないが、中位にまとまって多く認められる。

覆土 暗茶褐色土の単一層である。しまりが強く、全体にローム粒子が混入する。覆土に焼土は含まれない。自然堆積か人為的な堆積であるかは不明である。

遺物 覆土中より深鉢の破片が 37 点出土した。内、接合した 2 個体と破片 5 点を図示した。これらの破片はすべて床面上より 2～9 cm程浮いた状態で出土し、床面直上のものはない。他に、住居跡南東部から大型の自然礫が出土しているが、重機による表土除去作業中に位置が移動しており、元位置は異なる。いわゆる河原石であるが一部に被熱が認められることから、炉に関係する礫であった可能性もある。

2. 遺構外出土遺物

本調査区内での遺構確認作業中に出土した、遺構に伴わない遺物をここに掲載する。



第 10 図 遺構外 出土遺物実測図

第 5 表 SI-01 出土遺物観察表

No.	種別	法 量	特 徴	遺存率	出土状態
1	加工痕がある礫	最大長：4.7cm 最大幅：3.1cm 最大厚：1.0cm	小形の扁平な礫の周辺に粗い剥離が認められる。表裏面とも摩滅している。砂岩。	欠損	N-10グリッド (N-10杭から南に2.7m、東に2.5m地点表採)
2	石器剥片	最大長：1.8cm 最大幅：1.8cm 最大厚：0.5cm	不整形な剥片。打面側と末端部を欠損する。黒曜石。	欠損	J-10グリッド (J-10杭から南に3.2m、東に3.8m地点表採)
3	石器剥片	最大長：2.1cm 最大幅：1.8cm 最大厚：0.6cm	小形の剥片。下部欠損。頁岩。	欠損	I-8グリッド (I-8杭から南に2m、東に3.7m地点表採)
4	石器石鏃	最大長：3.0cm 最大幅：1.5cm 最大厚：0.3cm	側縁と基部を欠損する。黒曜石。	欠損	O-9グリッド (O-9杭から南に1.6m、東に8.4m地点表採)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1. 土坑

SK-18・26 は調査区内に点在する、近世以降と判断される土坑と覆土の特徴が異なることと、覆土中より古墳時代前期の土師器片が出土していることから、古墳時代の土坑とした。

SK-18 (第 11 図)

位置 調査区南西部の I-10 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。北西約 2.5m の位置に SK-19 と SK-20 が確認される。

規模・形状 平面形は北と東の辺が丸く外側に膨らむ隅丸長方形を呈し、確認開口部で長軸約 235 cm、短軸約 135 cm を測る。深さは確認面から平均約 20 cm である。底面は僅かに凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。北西隅にピット状の凹部が見られるが、本遺構に伴う掘方であるかは不明である。今回の調査で確認された土坑としては特に大型で、他に同様の遺構は検出していない。

覆土 ローム粒子とロームブロックを少量含む、しまりのない茶褐色土の単層 (第 11 図 1 層) である。中央に攪乱土 (第 11 図 2 層) が入る。

遺物 古墳時代前期に属すると思われる土師器壺の胴部破片 2 点を出土する。極小片であるため図示不能。

SK-26 (第 12 図)

位置 調査区中央のやや北西部にあたる J-6 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。南約 2 m の位置に SD-02 がある。

規模・形状 確認面での平面形は長軸約 130 cm、短軸約 65 cm の不整形である。深さは一定しないが確認面から平均約 30 cm を測る。底面は大きく凹凸し、壁も不規則な角度で立ち上がる。人工的な掘方でない可能性もある。

覆土 単層である。少量のローム粒子を含む暗黒褐色土で、しまりは弱い。人為的な堆積ではないと思われる。

遺物 古墳時代に属すると思われる、土師器壺の胴部破片 1 点を出土する。極小片であるため図示不能。

第4節 古代の遺構と遺物

1. ピット状遺構

平成 18 年度の試掘調査区トレンチ 3 b において、古代のものと判断されているピット状遺構 2 基が確認されているので、ここで掲載する。

S-01 (第 12 図)

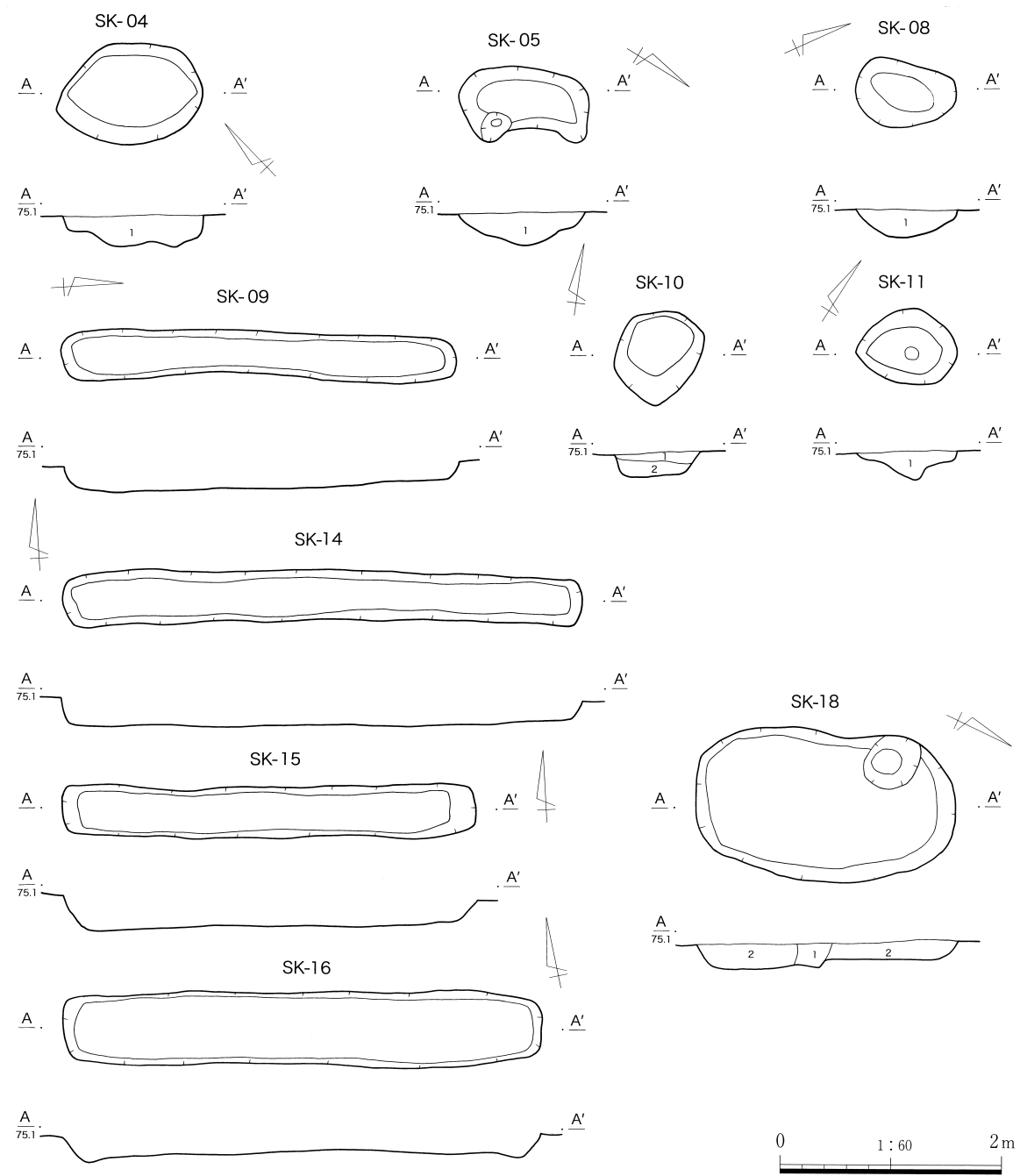
位置 平成 18 年度試掘調査区トレンチ 3 b (R-26 グリッド) に位置する。

重複・新旧 S-02 と重複し、これより新しい。

規模・形状 平面形は確認開口部で長軸約 90 cm、短軸約 60 cm の不整楕円形を呈する。深さは確認面から約 8 cm を測る。中央部を攪乱される。

覆土 黒褐色土の単層である。ローム粒と白色粒を僅かに含む。白色粒は火山灰の可能性はある。しまりはあまりない。

遺物 棒状の鉄製品の一部が出土した。断面の形状から釘の可能性はあるが、極小片のため詳細は不明。



- SK-04
1層 暗褐色土 ロームブロック少量。しまり弱。
- SK-05
1層 暗褐色土 ロームブロックやや多量。しまり弱。
- SK-08
1層 暗褐色土 ロームブロック少量。しまり弱。
- SK-10
1層 暗褐色土 ローム粒子少量。しまり弱。
2層 暗褐色土 ロームブロックやや少量。しまり弱。
- SK-11
1層 茶褐色土 ローム粒子やや多量。しまり弱。
- SK-18
1層 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。しまり弱。
2層 茶褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。しまり弱。

第 11 図 土坑実測図

S-02（第12図）

位置 平成18年度試掘調査区トレンチ3b（R-26グリッド）に位置する。

重複・新旧 S-01と重複し、これより古い。

規模・形状 確認開口部で長軸約68cm、短軸約62cm、深さ約70cmを測る。平面形は隅丸方形に近い円形を呈し、断面の形状は砲弾形である。柱痕が明瞭に観察される。

覆土 柱痕の土はしまりの弱い黒色土（第12図1層）で、細かいローム粒が僅かに混入している。柱の周囲を埋め固めた灰褐色土（第12図3層）にはロームが多く混じり、火山灰と思われる白色粒も僅かに含まれる。柱の下を固めた暗灰色土（第12図2層）にはロームはあまり混入していない。これらの2・3層の土は良くしまる。古い時代の遺構と推定され、良好な柱穴の特徴を示すので古代の堀立柱建物跡の柱の一つの可能性があげられている。

遺物 出土しない。

第5節 近世以降の遺構と遺物

1. 土坑

長方形土坑は調査区内に点在し、合計8基検出している。東西方向に延びる長方形土坑（長軸方向がやや南に振れた東方向を示すもの）と、南北方向に延びる長方形土坑（長軸方向がやや東に振れた北方向を示すもの）に分かれる。単独で検出するものと縦方向に2基並ぶものがあるが、横に並んで分布する土坑はない。これらの長方形土坑については、すべて同じ覆土が観察されている。

SK-09（第11図）

位置 調査区南部のK-9・K-10グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。

規模・形状 確認面での平面形は長軸約355cm、短軸約43cmの細長い長方形を呈す。深さは確認面から16～23cmとなる。底面は若干凹凸があり、南側に向かって低くなる。壁は緩やかな角度で立ち上がる。長軸の向きはやや東に振れた北方向を示す。

覆土 土層断面図の記載はないが、検出した長方形土坑については、すべて同じ覆土が観察されたと記録されている。黒褐色土の単層で、ロームブロックを多量に含み、しまりは弱い。

遺物 出土しない。

SK-14（第11図）

位置 調査区中央からやや北東部になるL-7グリッドに位置する。

重複・新旧 SD-03と重複する。新旧関係は不明である。東にSK-15が、長軸方向をほぼ同じくして並ぶ。

規模・形状 確認面での平面形は長軸約468cm、短軸約45cmの細長い長方形を呈す。深さは確認面から18～25cmとなる。床面は凹凸があり、西に向かって低くなる。壁は緩やかに立ち上がる。長軸の向きはやや南に振れた東方向を示す。

覆土 黒褐色土の単層で、ロームブロックを多量に含む。しまりは弱い。

遺物 出土しない。

SK-15 (第 11 図)

位置 調査区中央からやや北東部になる L-7・M-7 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。西側に近接して SK-14 が並ぶ。

規模・形状 確認開口部で長軸約 372 cm、短軸約 46 cm、深さ 25～31 cm を測る。平面形は細長い長方形を呈する。底面にはやや凹凸が見られ、西に向かって僅かに下がる。壁は大きく外側に開いて立ち上がる。長軸の向きはやや南に振れた東方向を示す。

覆土 黒褐色土の単層。ロームブロックを多量に含み、しまりは弱い。

遺物 出土しない。

SK-16 (第 11 図、写真図版二)

位置 調査区北東部の M-6・N-6 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。南に近接して SD-06 が東西方向に延びる。

規模・形状 確認開口部で長軸約 430 cm、短軸約 64 cm、深さ 15～25 cm を測る。平面形は細長い長方形を呈する。底面は凹凸が多く、東西両端が窪みを持つ。底面全体としては西に向かって低くなる傾向がある。長軸の向きはやや南に振れた東方向を示す。

覆土 ロームブロックを多量に含む黒褐色土の単層。しまりはない。

遺物 出土しない。

SK-17 (第 12 図)

位置 調査区東部の N-7・O-7・O-8 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。

規模・形状 確認開口部で長軸約 752 cm、短軸約 45 cm、深さ 10～15 cm を測る。平面形は非常に細長い長方形を呈する。底面は凹凸があり、壁は緩やかな角度で立ち上がる。長軸方向はやや南に振れた東方向を示す。

覆土 黒褐色土の単層で、ロームブロックを多量に含む。しまりは弱い。

遺物 出土しない。

SK-21 (第 11 図、写真図版二)

位置 調査区南東部の N-9 グリッドに位置する。

重複・新旧 縄文時代の竪穴住居跡である SI-01 の南東隅を切る。

規模・形状 確認開口部で長軸約 232 cm、短軸約 47 cm、深さ約 45 cm を測る。平面形は細長い長方形を呈する。底面には凹凸が見られ、壁はやや緩やかに立ち上がる。長軸の向きはやや東に振れた北方向を示す。

覆土 ロームブロックを多量に含む黒褐色土の単層。しまりはない。

遺物 出土しない。

SK-22 (第 12 図)

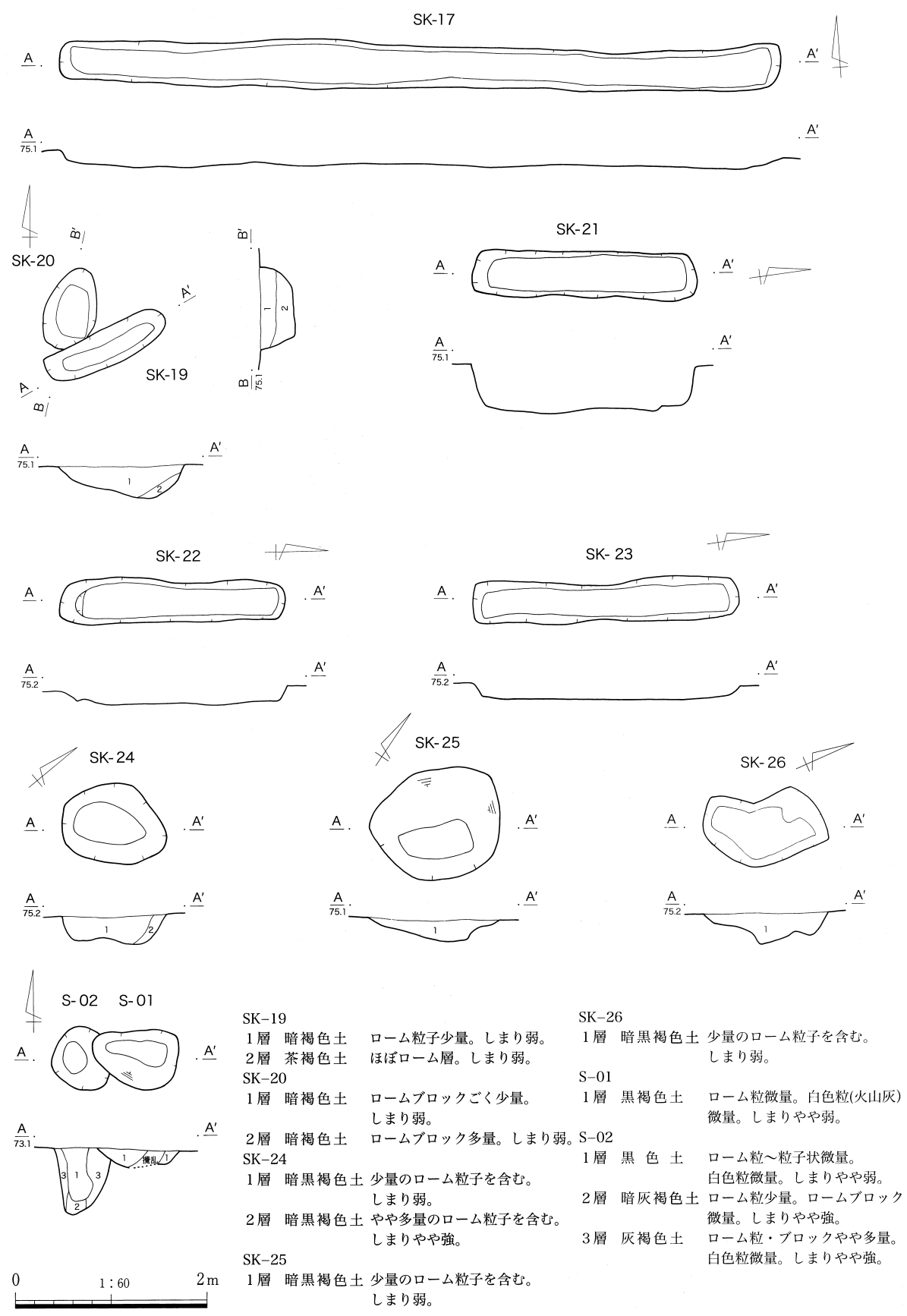
位置 調査区中央やや西側の I-7・I-8 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。南に SK-23 が同様な方向で並ぶ。

規模・形状 確認開口部で長軸約 233 cm、短軸約 45 cm、深さ約 16 cm を測る。平面形は細長い長方形を呈し、長軸はほぼ北方向の向きをとる。底面は凹凸があり、南壁手前で段を持つ。壁は緩やかな角度で立ち上がる。長軸の向きはやや東に振れた北方向を示す。

覆土 黒褐色土の単層。ロームブロックを多量に含み、しまりは弱い。

遺物 出土しない。



第12図 土坑・ピット状遺構実測図

SK-23 (第12図、写真図版二)

位置 調査区中央やや西側のH-8グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。北にSK-22が同様な方向で並ぶ。

規模・形状 確認開口部で長軸約276cm、短軸約45cm、深さ約15cmを測る。平面形は細長い長方形を呈する。底面はやや凹凸を持つが、概ね平坦である。壁は比較的緩やかに立ち上がる。長軸の向きはやや東に振れた北方向を示す。

覆土 黒褐色土の単層。ロームブロックを多量に含む。しまりは弱い。

遺物 出土しない。

2. 溝状遺構

谷向遺跡で検出した溝状遺構は合計4条である。掘り方の形状や覆土の状態、出土遺物などから、近世以降に区画溝(地割溝)の用途で掘られた溝であろうと思われる。SD-02・03の東は調査区外へ延びるが、東側のトレンチでは該当する溝の続きが確認できなかったことから、トレンチの手前で南方向に屈曲する形状をとるとと思われる。SD-07は現代の地割と一致する。

SD-02・03 (第13図、写真図版二・三)

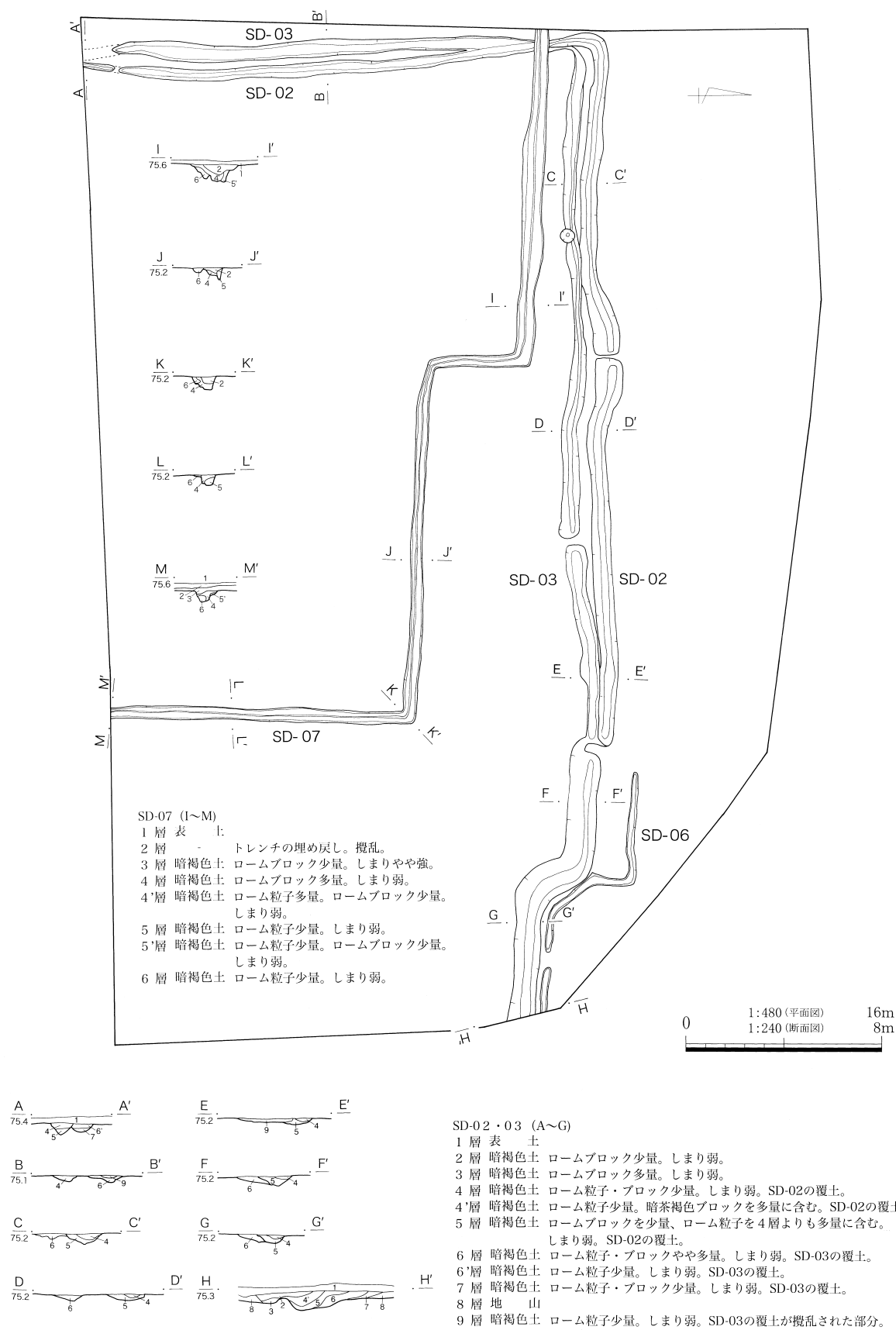
位置 調査区のG-10～O-7グリッドの範囲で確認された。調査区全面を東西に長く横断し、西端で南に向かってほぼ直角に曲がる。曲がった先でSD-02の南側は調査区外へと延び、SD-03の南側は調査区端の手前で浅くなり確認面では自然消滅するが、平行するSD-02と同様に調査区外の南へ続くと思われる。東側は両溝とも調査区外へと延びるが、調査区東と北東側のトレンチで溝の続きが確認されないことから、南方向に曲がって続くものと推定される。

重複・新旧 SD-02・03とも西端の屈曲部付近をSD-07に切られるため、SD-07より古い溝となる。SD-03の南壁が長方形土坑であるSK-14と重複しているが新旧関係は不明である。

規模・形状 SD-02・03は部分的に重複しながら同じ位置を平行して走る。切り合う部分での土層断面観察からはSD-03が先に掘られた溝で、ある程度SD-03の堆積が進行した時点で、やや位置をずらして掘り返された溝がSD-02であると判断される。遺構の確認面が比較的底部に近いと、調査時では溝の開口部が分かれて観察されるが、溝掘削当時の上部開口面ではSD-03からSD-02への掘り返しがはっきりしていたものと思われる。両溝とも底面は凹凸面の連続からなり、平坦部はほとんどない。特に硬化する面も観察されない。確認した規模は、新しいSD-02については確認開口部で幅約230cmを最大とし、最も狭い部分で50cm幅程度となる。深さは20～50cmの範囲で平均約35cm、途中で二カ所浅くなり途切れる。断面の形状は一定しないがSD-03についてはSD-02に掘り替えられた重複部分は不明であるが、単独で開口する部分でのみ計測すると、確認面で幅約185cmを最大とし、最も狭い部分で70cm幅程度となる。深さは12～36cmの範囲で平均約26cm、途中で二カ所浅くなり途切れる。

覆土 SD-02の覆土は、しまりのない暗褐色土からなる。ローム粒子やブロックの入り方の違いで主に2層に分層される。下層にロームの混入量が多い。自然堆積であろう。SD-03もSD-02の覆土と類似する暗褐色土を主体とする。やはり主に2層に分かれるが、上部の層にロームの混入が多く見られる。最上部の覆土が部分的に攪乱を受ける。それぞれの覆土に水の影響はみられない。

遺物 出土しない。



第 13 図 溝状遺構実測図

第3章 発見された遺構と遺物

SD-06（第13図、写真図版三）

位置 調査区のM-6～O-7グリッドの範囲で確認された。

重複・新旧 重複する遺構はないが、SD-02・03 東部の北側に接近して位置する。

規模・形状 確認できた掘方は溝の底面に近い部分で、最深で確認面から約18 cm、浅い部分で7 cm程度である。溝の配置と掘方の特徴がSD-02・03 と類似することから、SD-03→SD-02 に続く同区割り溝の掘り返しの一部である可能性がある。幅は確認開口部で約40～90 cm、底面は凹凸面の連続からなり、平坦面はない。断面の形状は一定しないが皿状を基本とする。

遺物 出土しない。

SD-07（第13図、写真図版三）

位置 調査区のG-7～M-10グリッドの範囲で確認された。

重複・新旧 西端でSD-02・03 と重複する。これらより新しい溝である。二度の掘り返しがあり、最初に掘られた古い溝をA期、次に掘り返された溝をB期、最も新しい溝をC期とする。

規模・形状 開口部の形状が確認できたのは最後に掘られたC期の溝のみで、確認面で幅約125 cmを最大とする。最も狭いところで約55 cmを測る。断面の形状は整わないところも多いが、逆台形を基本とする。深さは最深で、A期は60 cm、B期72 cm、C期68 cmと最初に掘られた溝が一番浅く、次のB期は三時期の中では最も深く掘られ、最後のC期はそれよりやや浅めに掘られる。最も浅い面で観察した深さの関係もA期10 cm、B期24 cm、C期17 cmと同様である。

覆土 A・B・C期とも単層である。A期の覆土は6層（第13図）とした暗褐色土が観察された。しまりは非常に弱くローム粒子が少量含まれる。B期の覆土は5層（第13図）とした暗褐色土で、やはりしまりは弱い。ローム粒子とロームブロックが僅かに入る。C期の覆土は4層（第13図）とした暗褐色土である。しまりは弱い。上面には攪乱の影響を多く受ける。全体にロームの混入が多く見られ、ロームブロックが多量に入る箇所とローム粒子が目立つ箇所がある。人為的な埋め戻しが成されたものと思われる。

遺物 近～現代のものである磁器碗の小破片を少数出土する。これらから溝の時期は近代以降と思われる。

第6節 時期不明の遺構と遺物

1. 土坑

以下に挙げる土坑8基については時期が確認できていない。形状は不整なものが多く、遺物も出土しない。

SK-04（第11図）

位置 調査区南部中央のL-10グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。

規模・形状 平面形は確認開口部で長軸約132 cm、短軸約92 cmの不整楕円形を呈する。深さは確認面から平均約28 cmを測る。底面は凹凸が多く見られ、壁は比較的垂直に近い角度で立ち上がる

覆土 単層で、しまりのない暗褐色土である。ロームブロックを僅かに含む。人為的な埋め戻し土か自然堆積によるものかは不明。

遺物 出土しない。

SK-05 (第 11 図)

位置 調査区南部の L-10 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。

規模・形状 確認開口部で長軸約 118 cm、短軸約 56 cm、深さ約 30 cmを測る。平面形は北側の両隅が外側にやや突出する隅丸長方形を呈し、断面の形状は段を持つ椀状である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 ロームブロックを多く含む、暗褐色土 1 層を確認した。しまりはない。人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

遺物 出土しない。

SK-08 (第 11 図)

位置 調査区南部の L-9 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。

規模・形状 確認開口部で長軸約 91 cm、短軸約 60 cm、深さは約 24 cmを測る。平面形は不整楕円形を呈する。断面はやや凹凸があり、中央に向かって窪む底面から、緩やかな角度で立ち上がる壁につながる。

覆土 しまりの弱い暗褐色土の単層である。ロームブロックが少量含まれる。

遺物 出土しない。

SK-10 (第 11 図)

位置 調査区中央からやや南西部になる I-9 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。東側に近接して SK-10 が位置する。

規模・形状 確認開口部で長軸約 82 cm、短軸約 74 cm、深さ約 20 cmを測る。平面形は五角形に近い不整方形を呈し、断面の形状は逆台形である。底面は平坦部が多く、壁は東側が緩やかな、西側が比較的急な角度で立ち上がる。

覆土 2 層を確認した。両層ともしまりの弱い暗褐色土で、ローム粒子やロームブロックを僅かに含む他は混入物は見られない。自然堆積と思われる。

遺物 出土しない。

SK-11 (第 11 図)

位置 調査区の中央からやや南西にあたる I-9 グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。西側に近接して SK-10 が位置する。

規模・形状 平面形は確認開口部で長軸約 92 cm、短軸約 69 cmの不整な楕円形を呈する。底面までの深さは平坦部で確認面から約 10 cm、最深部で約 26 cmを測る。底面の状態は概ね平坦で中央がピット状に窪む。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 単層である。しまりのない茶褐色土で、ローム粒子をやや多量に含む。

遺物 出土しない。

SK-19 (第 11 図)

位置 調査区南西部の H-9・I-9 グリッドに位置する。

重複・新旧 北側に SK-20 が接して位置する。切り合う SK-20 の覆土に SK-19 の覆土が観察されないので、SK-19 より SK-20 が新しいと記録されている。

規模・形状 確認開口部で長軸約 134 cm、短軸約 37 cm、深さ約 33 cmを測る。平面形は細長い隅丸長方形で

第3章 発見された遺構と遺物

である。底面の平坦部は少なく、北東側が深くなる。壁の立ち上がり角度は緩やか。

覆土 2層を確認した。北側底面直上に見られた茶褐色土はしまりのないロームが主体で、土坑掘削直後の崩落土と思われる。その上部に堆積した暗褐色土は、やはりしまりは弱いがロームが粒状で少量混じるのみなので、土坑廃棄後の自然堆積の可能性が高い。

遺物 出土しない。

SK-20 (第12図)

位置 調査区南西部のH-9グリッドに位置する。

重複・新旧 南東部にSK-19が接して位置する。土層断面による明瞭な切り合いの関係は不明であるが、調査記録からSK-19よりSK-20が新しい土坑とした。

規模・形状 確認面での平面形は長軸約86cm、短軸約55cmの楕円形である。深さは確認面から約25cmとなる。断面の形状は逆台形で、平坦な底面から壁が外側にやや開いて立ち上がる。

覆土 混入するロームブロックの量で2層に分かれる。下層の暗褐色土はロームブロックを多量に含み、しまりは弱い。上層の暗褐色土は、しまりは下層と同様に弱いがロームブロックの混入がごく少量である。人為的な埋め戻し土か自然堆積によるものかは不明。

遺物 出土しない。

SK-24 (第12図)

位置 調査区中央やや西側のI-8グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。西方向約4.5mの位置に、SK-22とSK-23が南北に並ぶ。

規模・形状 平面形は確認開口部で長軸約110cm、短軸約80cmの不整楕円形を呈する。深さは確認面から平均約18cmを測る。底面は二つの大きな円形の窪みを持つ。壁は緩やかな角度で立ち上がる。

覆土 しまりが強くローム粒子を多く含む暗褐色土と、しまりが弱くローム粒子が少ない暗褐色土の2層からなる。自然堆積と思われる。

遺物 出土しない。

SK-25 (第12図)

位置 調査区南西端のG-9グリッドに位置する。

重複・新旧 重複する遺構はない。東にSD-03が近接する。

規模・形状 確認開口部で長軸約135cm、短軸約115cm、深さ約22cmを測る。平面形はやや五角形に近い隅丸方形を呈する。底面は中央に向かって緩く窪み、壁は非常に浅い角度で立ち上がる。

覆土 少量のローム粒子を含むしまりのない暗黒褐色土の単層である。自然堆積と思われる。

遺物 出土しない。

第4章 まとめ

谷向遺跡が位置する福田台地は鹿沼市街地東側から壬生町中心部の北まで続く鹿沼台地の一部で、平坦面が良く残るが、北西方向に伸びる発達した浸食谷に向かって穏やかに傾斜する。本遺跡はこの台地縁辺部にある周知の埋蔵文化財包蔵地で、同台地上の南東部は平成 8 年度に北関東自動車道（都賀～上三川）建設に伴う優先着工区間の本調査（安藤美保 2001）として（以下「H 8 谷向遺跡」）、また北東部は平成 9 年度に壬生総合公園整備に伴う調査（池田敏宏 1999）として（以下「H 9 谷向遺跡」）発掘が行われている。

ここでは H 8 谷向遺跡と H 9 谷向遺跡の調査結果をあわせて、これら恵川支谷台地の東縁上に点在する遺構の分布状況から谷向遺跡の様相を概観し、まとめとしたい。

まず、最も北部に位置する H 9 谷向遺跡の調査区であるが、標高約 72.0～75.0m の範囲にあり、古墳時代前期の方形周溝遺構 2 基と弥生時代後期の竪穴住居跡 1 軒が確認されている。調査区は、微視的には西南西から北北東方向に向かって下がる地形上にあり、方形周溝遺構はこの斜面手前の見晴らしのいい台地平坦面に位置する。竪穴住居跡は浸食谷に向かう緩斜面上から検出した。

H 9 谷向遺跡の南西約 200m の位置に所在するのが、本書で報告した谷向遺跡となる。地形は標高約 70.1～75.2m の東北東方向に向かって下がる。北関東自動車道の本線部分の南側約 100×150m の範囲と北側およそ 130×210m の範囲、約 42,000 m² を対象とし、トレンチ掘削による確認調査を行った。その結果により、北側の対象範囲中央の台地平坦部から斜面部に移行する範囲にかけて、遺構・遺物の発見される可能性が推定されたため、この範囲約 8,700 m² を対象として本調査を行った。本調査区では、縄文時代の竪穴住居跡 1 軒と古墳時代の土坑 2 基、近世以降の溝状遺構 4 条と長方形土坑 8 基等を発見した。古墳時代の土坑は台地平坦面から、近世以降の溝状遺構と長方形土坑は台地平坦面から谷へ向かう緩斜面にかけて確認される。縄文時代の竪穴住居跡は台地端部から斜面部に移行する部分から検出し、加曽利 EIV 式期の土器を伴う。

この本調査区南東部に位置する H 8 谷向遺跡の調査では、本線部分について遺跡の範囲を確認する調査を前年度に行った上、遺構が検出した周辺約 3,900 m² を 2 カ所の調査区に分け、本調査を行った。東方向に向かって下がる標高約 67.5～74.0m の範囲にあり、西の調査区は谷部に面した台地頂上の平坦面に位置し、古代の火葬墓 1 基と側壁挟込土壇墓 2 基が確認された。火葬墓は土師器甕の蔵骨器を伴い、中から火葬骨や鉄釘が出土する。東の調査区は、これらの土壇墓が確認された台地を下った浸食谷へ至る斜面途中の平坦面にあり、古代の竪穴住居跡 1 軒が確認されている。

以上の調査において確認された谷向遺跡全体の遺構分布密度は低く、限定された調査区の範囲からはまとまった集落の広がりや確認できないが、遺構の検出状況から、竪穴住居跡は時期を問わず浸食谷へ下る斜面上に、墓は台地上に造られる傾向が明らかになった。このため、古墳時代から古代の墓域の広がりや台地上に、縄文時代から古代の集落は墓域より低い周辺の斜面上に展開していく可能性が残された。併せて古代の遺構については、H 8 調査区とこれを挟んだ本調査の南端確認調査区のみから検出するため、H 8 調査区以南に展開していくと推測される。

参考文献

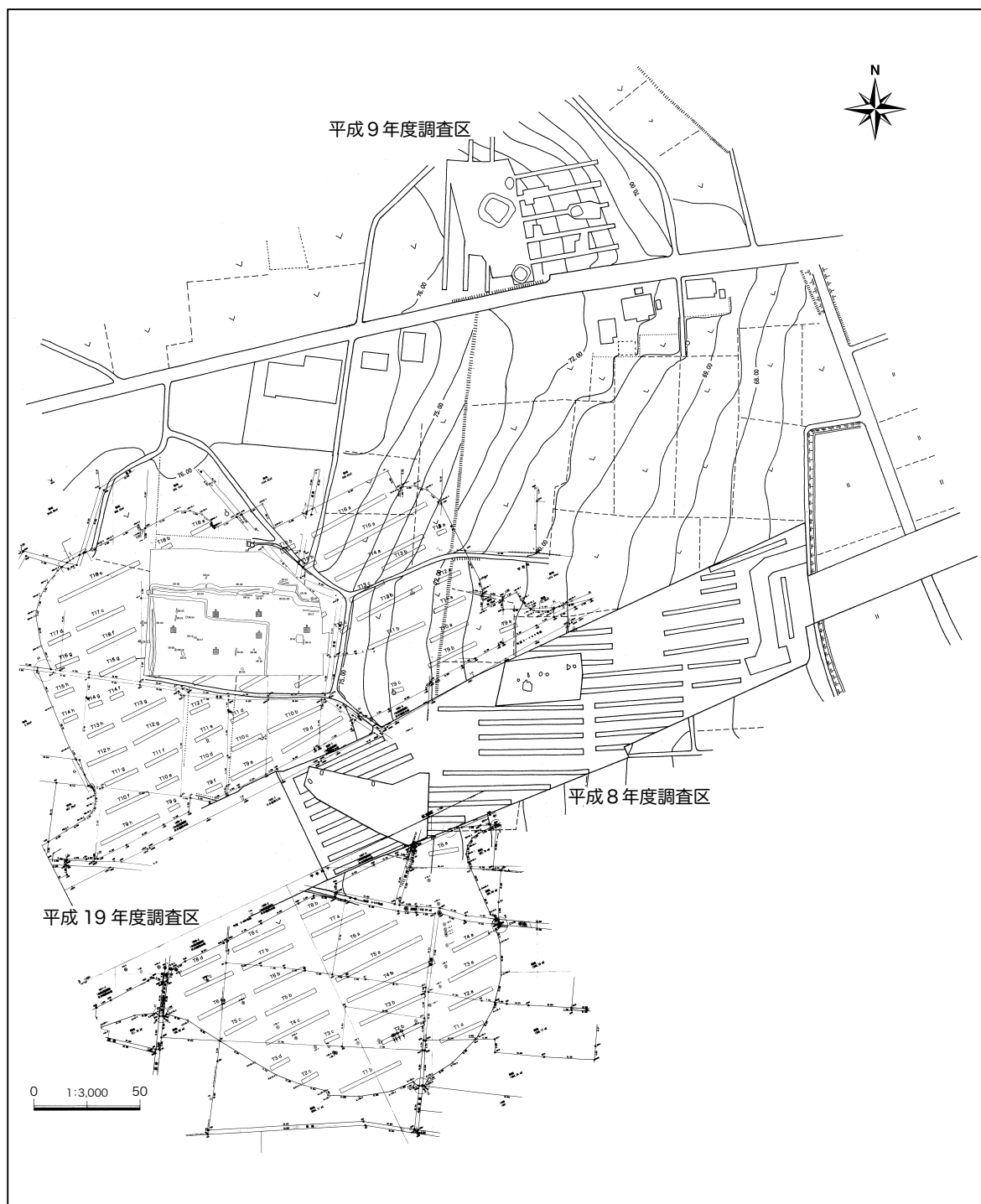
安藤美保 2001『谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 255 集 栃木県教育委員会（財）とちぎ生涯学習文化財団

第4章 まとめ

池田敏宏 1999『台畑遺跡・谷向遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第223集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団

壬生町史編さん委員会 1990『壬生町史』資料編 原始古代・中世 補遺 壬生町

壬生町史編さん委員会 1990『壬生町史』通史編Ⅰ 壬生町



第14図 谷向遺跡 調査区全体図

写真図版



1 遺構確認作業風景



2 SI-01 調査風景（南西から）



3 SI-01 遺物出土状況（南西から）



4 SI-01 遺物出土状況（南東から）



5 SI-01 北西部分遺物出土状況（北から）



6 SI-01 完堀（南から）



7 SK-16 完堀（東から）



8 SK-21 完堀（南から）



9 SK-23 完堀（南から）



10 SD-02 土層断面 D-D'（東から）



11 SD-02・03 土層断面 A-A'（北から）



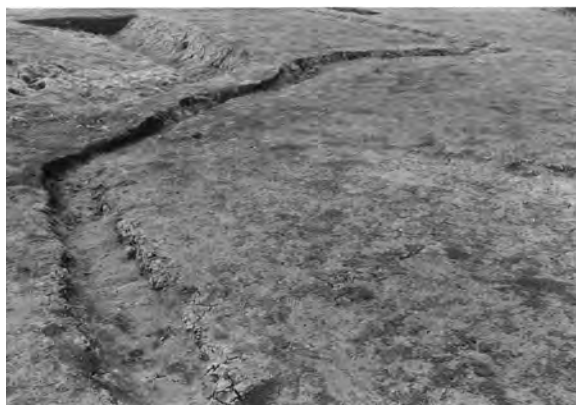
12 SD-02・03 土層断面 H-H'（西から）



13 SD-02・03 西側 完堀（南から）



14 SD-02・03 西側 完堀（北から）



15 SD-06 完堀（南東から）



16 SD-07 土層断面 I-I'（東から）



17 SD-07 土層断面 J-J'（東から）



18 SD-07 土層断面 M-M'（北から）



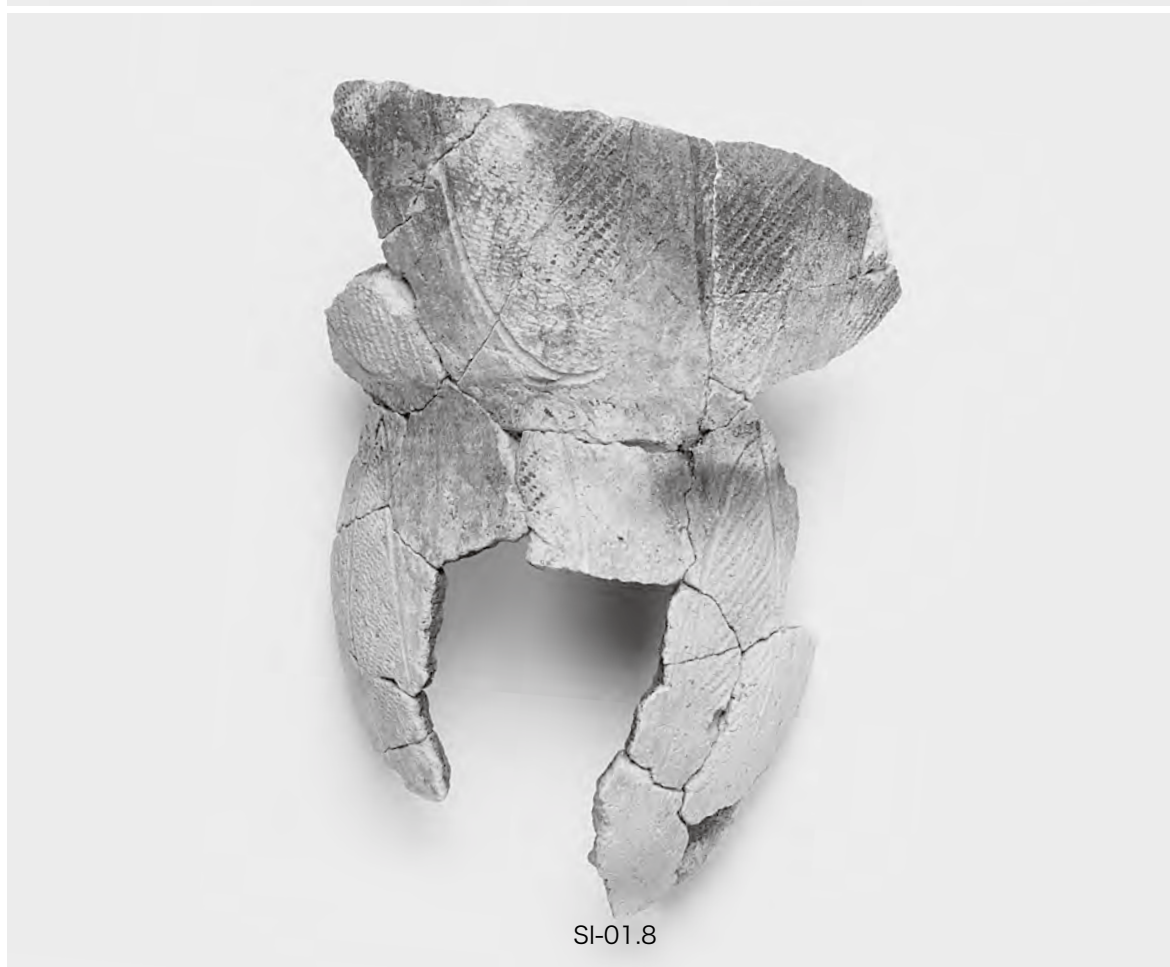
19 調査区全景（北東から）

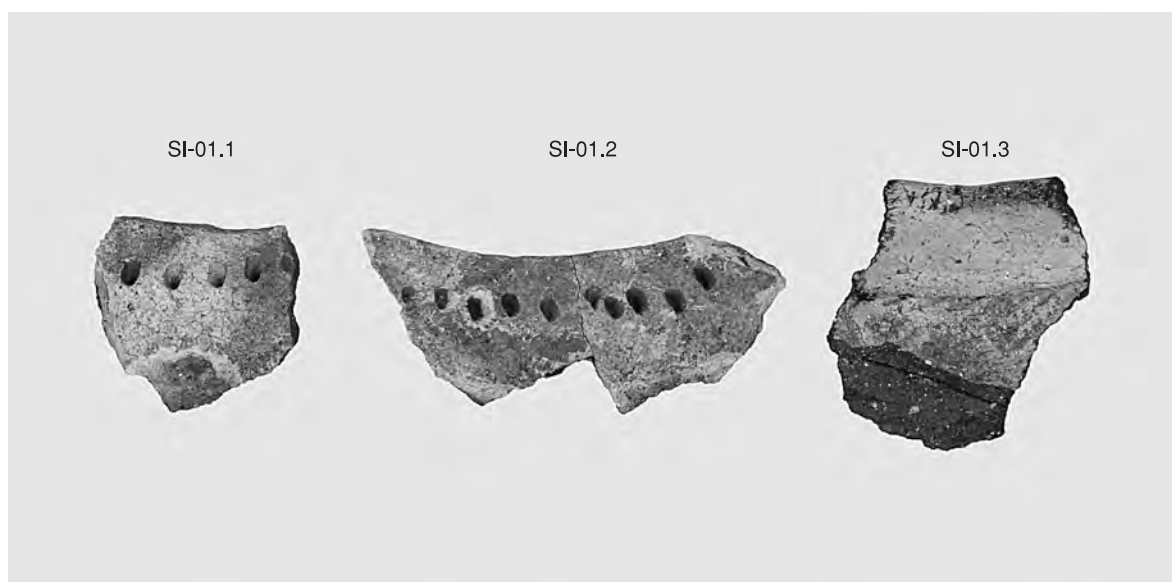


20 旧石器トレンチ調査風景



21 トレンチ⑤（南側から）





報告書抄録

ふりがな	たにむこういせき							
書名	谷向遺跡							
副書名	北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 XIII							
巻次	13							
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第321集							
編著者名	田代己佳							
編集機関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441							
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団							
発行年月日	西暦 2009年3月19日 (平成21年3月19日)							

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たにむこういせき 谷向遺跡	しもつがぐん 下都賀郡 みぶまち 壬生町 くにや 国谷	09361		36°27'14"	139°48'27"	20070201～ 20070331 20070401～ 20070630	8,700	道路（北関東 自動車道）建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷向遺跡	集落	縄文時代 中近世	竪穴住居跡 1軒 土坑 19基 溝跡 4条	縄文土器・石器 土師質土器・陶磁器・石製品	

要約	谷向遺跡は鹿沼台地の一部で台地上位面にあたる福和田台地上に位置する。恵川と黒川に挟まれ、国谷字新田地内に湧水点を持つ浸食谷に面した台地東縁に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。平成8年度に行った北関東自動車道本線部分に続いて、今回壬生パーキング建設箇所の調査を実施した。台地平坦部から斜面部に移行する箇所から、縄文時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡が発見された。ほかに調査区内からは縄文時代のものと思われる石器も出土する。
----	--

北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

- I 「一本松遺跡・文珠山遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 230 集 1999 年 3 月
- II 「杉村・磯岡・磯岡北」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集 2000 年 3 月
- III 「八剣遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 254 集 2001 年 3 月
- IV 「谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 255 集 2001 年 3 月
- V 「上神主・茂原 茂原向原 北原東」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 256 集 2001 年 3 月
- VI 「権現山遺跡・百目鬼遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集 2001 年 3 月
- VII 「西赤堀遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 304 集 2007 年 3 月
- VIII 「峰高前遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 308 集 2007 年 9 月
- IX 「高島遺跡群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 309 集 2008 年 3 月
- X 「下陰遺跡 I」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 310 集 2008 年 3 月
- XI 「西物井遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 316 集 2009 年 3 月
- XII 「西根 2 遺跡・小野寺城跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 320 集 2009 年 3 月
- XIII 「谷向遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 321 集 2009 年 3 月
- XIV 「五霊遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 322 集 2009 年 3 月
- XV 「原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎III遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 323 集 2009 年 3 月
- XVI 「曲田遺跡・馬場先遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 324 集 2009 年 3 月

栃木県埋蔵文化財調査報告第 321 集
谷 向 遺 跡
-北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 XIII-
発行 栃 木 県 教 育 委 員 会
宇都宮市塙田 1-1-20
TEL 028(623)3425
財団法人とちぎ生涯学習文化財団
宇都宮市本町 1-8
TEL 028(643)1011
平成 21 年 3 月 19 日発行
編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
下野市紫 474 番地
TEL 0285(44)8441
印刷 日立レフテクノ株式会社